

令和7年度

学校支援事例報告集

…教育委員会や学校と連携した…
……実践的研究について……



目 次

はじめに	1
オーダーメイド型学校支援事業	
01 教員をめざす生徒のための特別講座「鳴門高校 Education プログラム」 学校づくりマネジメントコース 藤田 完 他	2
02 「令和の日本型学校教育」実現のための次世代リーダー育成 学校づくりマネジメントコース 藤田 完 他	4
03 徳島県高等教育機関連携型次世代科学者発掘・養成講座 理科教育コース 早藤 幸隆	6
04 幼児の多様な動きを促す環境構成と指導力の向上プロジェクト 幼児教育コース 佐々木 晃 他	8
05 児童が主体性や創造性を発揮して取り組む学校図書館活動についての研究 幼児教育コース・児童図書室長 塩路 晶子 他	10
06 ノンフォーマル教育における数学の本質性と学際性 数学科教育コース 山中 仁 他	12
07 中学校数学の理解・思考に基づいた数学的に説明する力を育成する課題設計原理の開発 数学科教育コース 藤原 大樹 他	14
08 コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育 小学校英語教育センター 山森 直人 他	16
09 佐那河内村英語教育戦略ビジョンにもとづく外国語教育の推進 小学校英語教育センター 山森 直人 他	18
10 高等学校普通科におけるスマート農業を題材とした課題探究活動に関する研究 技術・工業・情報科教育コース 宮本 賢治 他	20
11 徳島県内のスーパーサイエンスハイスクール指定校における課題研究の支援体制の構築 理科教育コース 早藤 幸隆	22
12 特別支援学校の自立活動やキャリア教育を主とした活動の充実を広げる取り組み 特別支援教育コース 小倉 正義 他	24
13 特別支援学級担任の専門性の向上を図る学校コンサルテーションの取り組み 特別支援教育コース 小倉 正義 他	26
14 メタバースやVRを活用した特別支援ICT教材の開発と実践 幼児教育コース 湯地 宏樹 他	28
徳島県教育委員会等地域連携協力事業	
15 人と関わる力を育む、地域や小学校と連携した幼児教育カリキュラムの開発 幼児教育コース 佐々木 晃 他	30
16 セクシュアリティを理由としたいじめを防止するための授業及びカリキュラムの開発に関する共同研究 社会科教育コース 眞野 豊 他	32
17 運動部活動を支援するスピード測定とスピード能力向上プログラムの開発 保健体育科教育コース 南 隆尚 他	34
18 高等学校・中学校と連携した国際教育協力およびグローバル人材育成の推進 理科教育コース 寺島 幸生 他	36
19 教科書を題材にした「話すこと [やり取り]」の言語活動の効果的な運営方法の探求 —異なる反復の方法とその効果— 英語科教育コース 千菊 基司 他	38
20 絵本でつながる教育の場 特別支援教育コース 高原 光恵 他	40
21 家庭教育支援ワークショップの普及促進を図る広報媒体の在り方に関する共同研究 幼児教育コース 木村 直子 他	42
22 自立学習の定着と自己効力感の向上を目指した小学校算数科における探究学習の開発と検証 学習指導力・ICT教育実践力開発コース 竹口 幸志 他	44
23 メディア情報のファクトチェックとデータ活用を通じた対話力・批判的思考力の育成に関する実践的研究 学習指導力・ICT教育実践力開発コース 長井 映雄 他	46
24 盲学校における境界性人格障害の中核症状と対応に関する共同研究 学習指導力・ICT教育実践力開発コース 石川 勝彦 他	48
25 地域や博物館の教育資源を活用した教育活動 理科教育コース 寺島 幸生 他	50
26 SDGs 達成に向けた意識・行動変容を推進する大学×NPO連携の教育活動 理科教育コース 寺島 幸生 他	52

はじめに

本学では、令和4年度より「学校支援事例報告集」を刊行し、教育委員会、学校園、地域が抱える課題に対して本学がどのように寄り添い、協働してきたのかを、事業の成果とともに共有してまいりました。

令和5年度から本格的に始動した「オーダーメイド型学校支援事業」は、教育委員会等から寄せられた教育改善ニーズと、本学が有する教育研究資源を丁寧にマッチングし、課題解決に向けたチームを編成して支援を行う取り組みです。本事業では、単なる問題解決にとどまらず、アウトプット（提供した支援）、アウトカム（短期的成果）を踏まえ、最終的にインパクト（地域や学校、次代を担う子どもたちの成長への波及効果）を重視している点に特色があります。

また、「徳島県教育委員会等地域連携協力事業」では、教育委員会や学校と連携した共同研究を、依頼機関と大学が協力して進める事業として位置づけています。

研究成果の社会・大学教育への還元を重視し、

- (1) 徳島県教育委員会等との共同研究
- (2) 徳島県内市町村教育委員会・他県教育委員会・学校との共同研究
- (3) 大学自身の課題認識に基づく共同研究

という3つの形態で展開してきました。こうした協働は、地域が抱える多様な教育課題に対して、より実践的で持続可能な解決策を創出する基盤となっています。

今年度の報告書には、オーダーメイド型学校支援事業14件、徳島県教育委員会等地域連携協力事業12件の計26件を収録しています。いずれの取り組みも、教育現場等の切実な課題に対して、大学と教育委員会・学校が知恵と経験を持ち寄り、今後の教育実践に活かす知見が詰まっています。

本学はこれからも、地域の皆さまと協働し、学校教育の質の向上と、子どもたち一人ひとりの健やかな成長に資する研究・実践を推進してまいります。本書が、皆さまの教育活動の一助となり、さらなる実践の発展や新たな連携の契機となれば幸いです。

鳴門教育大学理事（地域連携・附属学校担当） 美馬 持 仁

教員をめざす生徒のための特別講座 「鳴門高校 Education プログラム」

徳島県立鳴門高等学校

01

学校づくりマネジメントコース 藤田 完
学校づくりマネジメントコース 竹内 敏
徳島県教育委員会 教育創生課 光山 幸典
徳島県立鳴門高等学校 森 康晴

学校づくりマネジメントコース 藤井伊佐子
生徒指導コース 小坂 浩嗣
鳴門市教育委員会 学校教育課 上塚 牧雄
徳島県立鳴門高等学校 天羽 貴章

研究事業の概要

教員不足が全国的な課題となる中，教員をめざす生徒を育成するために，令和7年度より鳴門高校において教職特別講座「Education プログラム」が開設された。1年生を対象とした「Education プログラムⅠ」の講座の実施及び来年度実施予定の「Education プログラムⅡ」のコンテンツ開発にむけた共同研究を行った。

具体的な取り組み

- ①令和7年度実施の「Education プログラムⅠ」の各講座への指導助言
- ②令和8年度実施予定の「Education プログラムⅡ」のコンテンツ開発への指導助言
- ③鳴門市及び板野郡の小中学校等との連携についての指導助言

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1. 「Education プログラムⅠ」の実施支援

鳴門高校1年次生39名を対象に年間35時間のプログラムの実施を支援した。

Lesson 1：「オリエンテーション・ガイダンス」

Lesson 2：「働く理由について話し合おう

ーホワイトボード・ミーティング® 基礎編ー

Lesson 3：「教職の意義について話し合おう

ーホワイトボード・ミーティング® 応用編ー

Lesson 4：「一日大学生になる日ー鳴門教育大学フィールドワークー」

Lesson 5：「教職に関する本を読もうービブリオトークに挑戦！ー」

Lesson 6：「SNSの利活用について話し合おう

ーディベート&プレストに挑戦！ー

Lesson 7：「多様性を考えるーロールプレイに挑戦！ー」

Lesson 8：「ようこそ先輩ーパネルディスカッションー」

Lesson 9：「教職の魅力を考えるープロ教師を囲んでラウンドテーブルー」

Lesson 10：「成果発表会」



(Lesson9 教職の魅力を考える)

2. 「Education プログラムⅡ」(令和 8 年度実施予定) のコンテンツ開発

毎月 1 回の「Education プログラム合同ワーキンググループ」に参加し、体験活動を中心にした「Education プログラムⅡ」のコンテンツを共同で開発した。

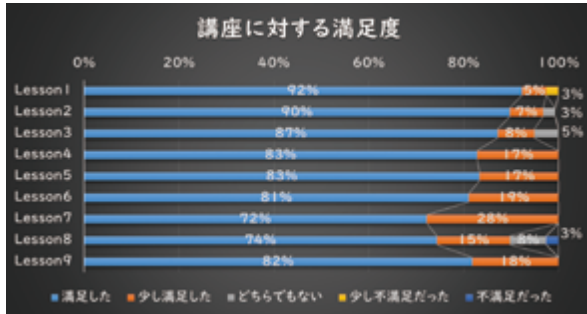
3. 「Education プログラム推進会議」(年 2 回開催)に参加し、推進体制等について協議した。

4. 鳴門市の体験活動協力校を訪問し、事業概要を説明し協力依頼をした。

アウトカム (短期的成果) ●

1. 「Education プログラムⅠ」に関する生徒の評価

講座内容への満足度

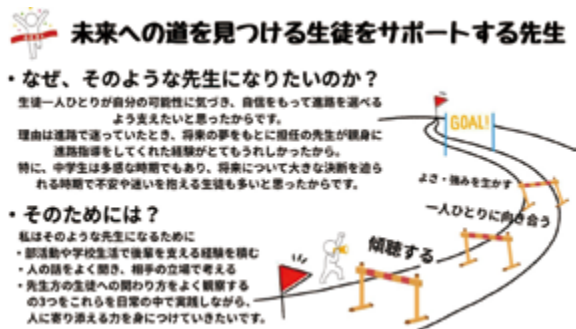


全ての授業を通じ、受講生の満足度は極めて高い水準で推移した。「満足した」「少し満足した」の合計は、ほぼすべての回で 90% 以上を維持した。対話的なワークショップを中心とした授業形式や、鳴門教育大学との連携が、生徒の興味・関心を惹きつけ、充実した学びを提供できていたことが分かる。

2. 「Education プログラム成果発表会」を開催

1 年間の学びを振り返り、各生徒は「めざす教師像」についての成果物を作成し発表した。

〈生徒の成果物「めざす教師像」〉



3. 令和 8 年度実施予定の「Education プログラムⅡ」年間計画案作成

鳴門高校 2 年次生を対象に年間 35 時間のプログラムを共同で開発した。

Lesson 1: 「オリエンテーション・ガイダンス」

Lesson 2: 「体験活動の心構え等」

Lesson 3: 「体験活動の準備」

Lesson 4: 「体験活動」

- ・ 鳴門市の中央保育所・撫養幼稚園・撫養小学校・鳴門市第一中学校及び鳴門高等学校、板野特別支援学校を協力校として体験活動を実施予定。
- ・ 生徒は 90 分間の体験活動を 4 種類選択し、チームで協力しながら主体的に取り組む。

Lesson 5: 「体験活動のリフレクション」

Lesson 6: 「現職教員との交流」

Lesson 7: 「教職の魅力を考える」

Lesson 8: 「成果発表会」

インパクト (波及効果) ●

1. 「Education プログラムⅠ」の様子は、NHK のニュース番組で紹介され、徳島新聞・読売新聞にも掲載された。
2. ケーブルテレビ鳴門により「Education プログラム・成果発表会」の特集番組 (90 分) が制作され放送された。
3. 「Education プログラム」を受講する鳴門市在住の生徒 10 名に対して、鳴門市から毎月 2 万円の奨学金が給付された。
4. 「Education プログラムⅠ 実践活動報告集 (令和 7 年度)」を 300 部作成し、県・市町村教育委員会及び中学校へ配布。

「令和の日本型学校教育」実現のための 次世代リーダー育成

藍住町教育委員会

02

学校づくりマネジメントコース 藤田 完
藍住町教育委員会 堤 広幸

学校づくりマネジメントコース 葛上 秀文
藍住町立藍住東小学校 岡田 朋之

研究事業の概要

徳島県教育委員会と鳴門教育大学が共同で実施している主幹教諭研修及び指導主事ファシリテーション能力養成研修等で得られた知見を普遍化し、藍住町教育委員会主催による町内小・中学校のミドルリーダー教員を対象とした研修会の企画・運営の効果的な在り方について、実践研究をとおして明らかにすることを目的とする。

さらに、この研修をとおして、市町村単位での次世代リーダー育成のしくみづくりや、それを生かした学校改善の可能性について考察する。

具体的な取り組み

- ①令和7年度藍住町ミドルリーダー研修会の実施
- ②研修会に向けたスタッフによる事前打合せ会の実施

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

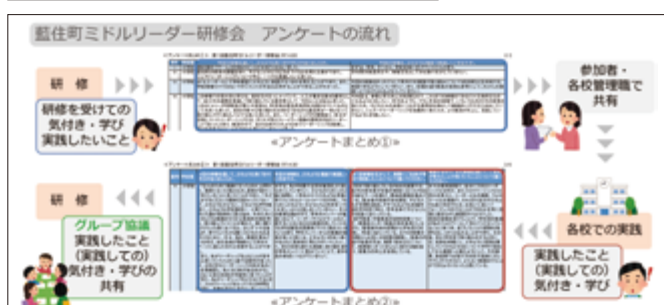
1 藍住町ミドルリーダー研修会の実施

藍住町立小・中学校のミドルリーダー教員（17名）を対象に年間5回の研修会を実施した。本研修会では、「とくしま教員育成指標」との関連を図りながら、リーダーとしての力量形成につながる講義・演習を行った。また、参加者が各学校や地域の抱える課題の解決に向けて研修を生かした実践に取り組む「研修（理論）」と「実践」の往還を重視し、各参加者が「在籍校で行った実践」と「実践をとおして得られた学び」を共有・意見交換する『グ

ループ協議』を毎回取り入れた。

この往還を支えるツールとして、研修会での学びを記録する「事後アンケート」と各校で取り組んだことを記録する「実践メモ」を集約した「アンケートまとめ」を作成した。これを参加者に配付するとともに、各校校長にも送付し、校内での実践の支援や人材育成のツールとして活用できるようにした。

令和7年度研修プログラム	
【第1回】	令和7年 4月30日（水） 教育長講話・リーダーシップと人材育成
【第2回】	令和7年 6月24日（火） グループ協議・メンタルヘルスと働き方改革
【第3回】	令和7年 8月22日（金） グループ協議・徳島県の教育施策
【第4回】	令和7年 11月26日（水） グループ協議・学校とリスク・クライシスマネジメント
【第5回】	令和8年 2月27日（金） グループ協議・全体協議



実践したことを記録する「実践メモ」を集約した「アンケートまとめ」を作成した。これを参加者に配付するとともに、各校校長にも送付し、校内での実践の支援や人材育成のツールとして活用できるようにした。

2 研修会に向けたスタッフによる事前打合せ会の実施

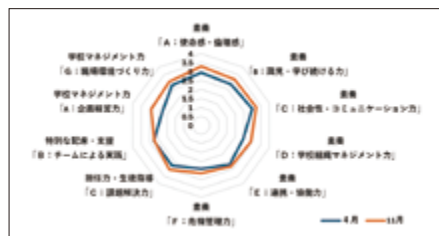
研修会の実施にあたっては、毎回、スタッフ（教育長・大学教授・各校教頭・大学院生）で事前打合せ会を行い、前回研修の振り返りや次回研修内容の改善について協議した。打合せ会をとおして、研修内容の質的向上を図るとともに、教頭自身が人材育成の当事者としての意識を高め、持続可能な研修運営体制の構築を目指した。



アウトカム（短期的成果）

1 ミドルリーダーとしての力量形成

○《参加者の資質・能力に関する自己評価アンケートの結果》からは、ほとんどの資質・能力において、達成度の自己評価がバランスよく向上していることが確認された。これは、本研修会が個別の知識や技能の習得を目的とするものではなく、各回をとおして「ミドルリーダーとしていかにあるべきか」を繰り返し問い続ける構造であったことと関係していると考察できる。



○《参加者へのインタビュー》からは、ミドルリーダーの役割や立ち位置を、単に「学校組織の中位に位置する教員」や「人生の中間期にある教員」として捉えるのではなく、「教職員をつなぎ、巻き込み、学校組織に影響を与える存在」として捉えるようになっていったことがうかがえた。また、「自分は何を担う立場なのか」「組織の中でどのように振る舞うべきか」といった【問い】を持ち続けることで、個々の業務にとどまらず、学年や学校全体を俯瞰する視点が形成されていた。

○《参加者の在籍校校長へのインタビュー》からは、本研修会の実施が参加者のミドルリーダーとしての役割意識を高めるだけでなく、行動面での変容にもつながっていることが示唆された。各校校長は、参加者が研修で得た学びを生かし、自らの考えを積極的に発信したり、学校改善に主体的に関わったりする姿を成果として捉えている。

2 望ましい学校文化の形成

研修をとおした参加者の変容が、学校内における望ましい学校文化の形成にも一定の影響を及ぼしていることも示された。これは、《アンケートまとめ》の共有や、研修の企画・運営に携わった教頭が、参加者の内面理解や実践への支援に関与した結果であると考えられる。

3 人的ネットワークの構築

小・中学校の校種を越えた参加者相互のネットワークに加え、スタッフである教頭どうし、また参加者とスタッフとのネットワークも形成され、町全体の教育を支える人的関係の構築にも一定の効果が認められた。

4 管理職の力量形成

スタッフとして参加した各校教頭は、よりよい研修を創り上げるために熟議を重ねる過程をとおして、人材育成の当事者であり、研修の設計者であるという認識を深めていった。このことは、次年度以降の持続可能な研修の設計・運営にも大きな意義をもつと考えられる。

インパクト（波及効果）

1 学校改善への波及

藍住東小学校では、本研修会参加者が中心となり「スクールアップグレード委員会」の実践に取り組み、「子供にとって『学びたいこと、やりたいことがある学校』にする」ことを共有価値として学校改善を進めた。この取組は、対話を重視する協働的な学校文化の形成にもつながっていった。

藍住町が求めてきた「学校組織を支え、次代を担うミドルリーダーの育成」というニーズに応える形で、「研修（理論）」と「実践」を往還させる町単位での次世代学校リーダー育成の研修システムの構築が、参加者に「今、何をなすべきか」を立ち止まって考える機会を提供し、現場に根ざした学校改善につながっていったことが確認できた。

このように、人材育成と学校改善が同時並行的に進むしくみを構築した点に、本研修モデルの大きな特徴がある。循環的な過程をとおして、個々の実践が単発的な取組にとどまらず、町内各校の学校改善へと広がる可能性を示した点は、本実践の重要な成果である。

このように、人材育成と学校改善が同時並行的に進むしくみを構築した点に、本研修モデルの大きな特徴がある。循環的な過程をとおして、個々の実践が単発的な取組にとどまらず、町内各校の学校改善へと広がる可能性を示した点は、本実践の重要な成果である。

2 四国ブロック町村教育長協議会における取組発表 (R7.8.7)

研究協議「特色ある教育の取り組み」の提供事例として、「次世代学校リーダー育成に向けた『藍住町ミドルリーダー研修会』の取り組み」について発表を行い、四国4県の町村教育委員会で共有した。



徳島県高等教育機関連携型 次世代科学者発掘・養成講座

徳島大学，徳島文理大学，四国大学，阿南工業高等専門学校
徳島県教育委員会，徳島市教育委員会，鳴門市教育委員会

03

理科教育コース 早藤 幸隆

研究事業の概要

社会の複雑化と科学技術の先端化・高度化を支え、発展させる次世代を担う児童生徒の早期育成が徳島県教育委員会、徳島市教育委員会、鳴門市教育委員会において要望されている。先見性・先駆性、独創的な知の創出の力量形成が求められている現代において、学習者の個性的な資質・能力を磨くオール徳島による環境の確立を目指した次世代科学者の発掘・養成が求められている。本事業は、鳴門教育大学を中核機関として、徳島県高等教育機関である徳島大学・徳島文理大学・四国大学・阿南工業高等専門学校と共に、徳島県・徳島市・鳴門市教育委員会、学校、地域の教育機関・科学技術分野の関連機関および専門家との連携により、一定水準以上の理数系領域に強い意欲と高い才能を有する小学5・6年生及び中学生を対象に、問いの資質・能力（探る・究める・発見する）の連続性の育成を重視しながら、成長型の自己実現を伴う自律的な探究と成果を伝えるコミュニケーション能力を育む分野領域横断的 STEAM 教育講座を実施することにより、未来を切り拓く次世代の科学技術イノベーションを先導する科学者を発掘・養成する。

課題解決の方針

- ①学校、教育委員会、地域の教育機関、科学技術分野の関連機関および専門家から構成される徳島県高等教育機関連携型次世代科学者発掘・養成講座運営委員会が企画し、分野領域横断的 STEAM 型問題解決の資質・能力を重視しながら、受講生の能力に応じた課題研究指導を実施する。
- ②産学官民の連携によるオール徳島の環境を活かしながら、徳島エリアの教育資源を効率良く活用した個別最適化な STEAM 教育プログラムを提案し、教育的還元を図る。
- ③徳島県を中心とする SSH 指定校等との接続を踏まえて、児童生徒の科学に関するキャリア意識やイノベーターとしての資質を高め、理数系を目指す進路選択の推進を図る。

具体的な取り組み

今年度の研究応用プログラムは、研究応用要素に重点を置いた受講生の能力・資質の育成を目指し実施した。

◆研究テーマの設定

研究テーマの設定は、受講生の興味・関心が高い課題を重視すると共に、実施期間内に実現可能性があり、研究室マッチングにおいて研究指導教員と受講生との面接により、受講生が課題に没入でき、社会的・学問的に意義があるテーマを決定した。

◆指導方法（展開）の工夫

研究応用プログラムにおける課題研究の指導は、鳴門教育大学、徳島大学、徳島文理大学、四国大学、阿南工業高等専門学校の教員が、幅広い分野・領域で研究指導を担当した。課題研究は、月に数回（主に土日又長期休暇中は、実施回数を増加）程度とし、受講生の研究進捗を見極めながら実施回数を調整した。研究実施場所は、研究指導教員の研究室とし、実施時間は13時から17時とした。研究テーマは、原則として研究指導教員の専門領域に従い、実証的な研究を奨励した。

◆研究指導の工夫

研究指導は、研究指導教員がほぼマンツーマンで受講生の研究活動を実施し、主体性の確保に努めながら、研究遂行スキルの育成に努めた。また、研究応用プログラムの受講生を対象として、研究倫理（生命倫理）及び科学英語に関する講義を実施した。研究倫理に関する講義では、責任と倫理を意識し、研究応用プログラムにおける課題研究を遂行する事を意識付けた。科学英語に関する講義では、科学英語による論文（概要）の書き方及び科学英語の専門用語について論ずると共に、研究応用プログラムの受講生に科学英語の必要性を理解させた。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

研究応用プログラムにおける課題研究を推進するため、研究活動中に定期的に受講生の面談を行い、研究の進捗状況や意欲・能力等を確認すると共に、次世代科学者発掘・養成講座運営委員会等により組織として継続的に対応可能な状況を維持する。また、研究指導教員は、活動状況を把握し、研究活動の改善に努める。更に、研究活動の成果発表として、次世代科学技術チャレンジプログラム全国受講生研究発表会、各種学会発表及び徳島県スーパーサイエンスハイスクール（SSH）生徒研究合同発表会、受講生研究成果発表会に向けて、受講生は研究指導教員から指導を受けながら、研究成果の輩出を促進した。

◆その他

課題研究の分野・領域、テーマなどにより異なるが、自宅等での受講生の研究活動として、課題に関する演習の継続、実験結果におけるリサーチラポノートへのまとめとデータの解釈、測定実験の数的処理、分析機器のスペクトルデータの解析、研究指導教員から配布された文献資料のまとめ等を実施し、随時研究支援を行った。

アウトカム（短期的成果）

◆受講生の成果

- 第 69 回日本学生科学賞徳島県審査（高校の部）最優秀賞（徳島県知事賞） 1 件
- 第 69 回日本学生科学賞徳島県審査（中学校の部）優秀賞（徳島県教育長賞） 2 件
- 2025 年日本化学会中国四国支部大会（香川大会）における高校生優秀発表賞 1 件
- 2025 年日本化学会中国四国支部大会（香川大会）における研究（ポスター）発表 5 件

◆修了生の成果（追跡調査）

- 第 69 回日本学生科学賞徳島県審査（中学校の部）優秀賞（徳島県教育長賞） 1 件
- 令和 6 年度徳島県 SSH 生徒研究合同発表会 最優秀賞（口頭発表） 1 件
- 令和 6 年度徳島県 SSH 生徒研究合同発表会 最優秀賞（ポスター発表） 1 件
- 令和 6 年度徳島県 SSH 生徒研究合同発表会 優秀賞（ポスター発表） 1 件
- 令和 6 年度徳島県 SSH 生徒研究合同発表会 優良賞（ポスター発表） 1 件
- 令和 6 年度徳島県 SSH 生徒研究合同発表会 奨励賞（ポスター発表） 1 件



読売新聞掲載記事（2025 年 1 月 6 日）

インパクト（波及効果）

社会の複雑化と科学技術の先端化・高度化を支え、発展させる次世代を担う児童生徒の早期育成には、個性的な資質・能力を磨く環境の確立を目指した先進的な科学教育が必要である。これらの成功の鍵を握るのは、児童生徒の人間の成長と資質・能力の育成に最も重要な役割を果たす質の高い教員の養成である。その教員養成の中心となるのが教員養成大学であることを深く踏まえ、教育学系と医学系・理工学系（教育の世界と研究の世界の協働）が連携し、問いの資質・能力（“探る・究める・発見する”）の育成を重視しながら、幅広い専門研究における探究活動を取り入れた科学教育プログラム及び課題研究の実施と共に、それらを持続的に推進可能な組織体制の構築を可能にする。

幼児の多様な動きを促す環境構成と指導力の向上プロジェクト

藍住町教育委員会

04

幼児教育コース 佐々木 晃
藍住南幼稚園 佐野 裕美

藍住北幼稚園 梯 直美
藍住西幼稚園 岡崎恵美子
藍住東幼稚園 宮成 南子

研究事業の概要

藍住町立幼稚園に在園する幼児の体力を伸長させるとともに教職員の幼児理解と指導力の向上を図る。幼児期に「体を動かして遊ぶ楽しさ」のための3要素である「からだ」「きもち」「うごき」を理解し、「動きの多様化」と「動きの洗練化」の二つの方向性を踏まえた環境構成と指導の方略を身につける。

具体的な取り組み

1. 幼児の多様な動きを促す環境構成と援助についての講義を聞き、自園での実践計画を作成。
2. 藍住町内の職員研修会を年2回実施し、幼児期にふさわしい活動や遊びについてスキルアップを図る。
3. 公開保育を実施し、幼児の多様な動きを促す環境構成と指導の実際を提案すると共に、その効果について町内公立小学校教員や保育所職員から評価を得る。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1. 保育時間における体を動かす遊びや活動の時間（週10時間）
2. 参観日などを活用した保護者への啓発と家庭での親子の活動時間（週1時間）
3. 職員向け研修（6時間）

アウトカム（短期的成果）

1. 公開保育における町内公立小学校教員や保育所職員からの環境構成と援助に対する評価
2. 藍住町立幼稚園職員によるスキルアップについての自己評価（アンケート）
3. 幼児の体力向上を促す「架け橋カリキュラム（前期）」の作成

インパクト（波及効果）

1. 幼稚園教員の幼児理解と身体発達を促すための環境構成や援助についての意識の向上
2. 家庭と連携した心身の健康促進の意識の向上
3. 町内の公立小学校との運動や健康増進のための取組への発展

幼児の体力向上を促す「架け橋カリキュラム(前期)」 藍住北幼稚園5歳児

活動	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	内容	
園行事	入園式 新入児歓迎会 家庭訪問・保育参観	こどもの日の集い 親子交通安全教室	保育参観・学級懇談 歯みがき教室 プール開き	個人懇談 七夕まつり	キッズフェスティバル	運動会 バス遠足	いもほり	生活発表会 クリスマス会	保育参観 入園・入学説明会 個人懇談	体験入園 体験入学	ひなまつり お別れ会	修了式・修業式	
園外活動	行先 ハワ園・神明神社・小学校給食室	幼稚園周辺	杉神社	・江ノ口児童館・神明神社・珍成集会所・文化ホール	小学校	住吉児童館						身近な地域社会や自然に関心を持つ 季節の移り変わりや気付き、不思議さや美しさを感じる 交通安全ルールを身に付けて、園外で活動する 地域の人たちと親しく	
自然	自然との かかわり 道徳や公園などの草花を見る 畑や田の様子を見る	田や用水路の小動物に触れる(オタマジャクシ・ザリガニなど) 初夏や夏の花を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	紅葉や雪の景色を観賞(ハワ・アジサイ・ヒマワリなど)	両腕や両足の発達への感謝の気持ちを持ち、大きくなったことを喜ぶ	
誕生会	・昨年の経験などを生かし、教師とともに誕生会の計画や進行などに取り組む	・毎月の誕生会の計画や進行をクラス単位で担当し、相談しながら協力して進めていく											
絵画製作	クレパス 自分の顔を描く(マーカー)・楽しかったことを描く (ザリガニ・カタツムリ・キュウリ・トビ・ヒマワリなど)	・小動物や野菜などをよく見て描く (マブリンク) (ブラッシング)	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	・絵画(運動会) 形や動きを捉える	してあげたいことを考えて、友達を祝う。 色々な用具を用達に応じて正しく使い、扱い たり、作ったりすることを楽しむ 細かいところまでよく観察したり、動きを捉え たりし、丁寧にのびのびと描く 遊びに必要なものを友達と相談しながら作り 上げていく
リズム遊び	歌 知っている歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	・いろいろな歌や新しく覚えた歌をうたう (小さいねえさん・おんがら・さんぽ)	色々な歌を友達と楽しんで歌う 楽器の名前が分かり、正しい持ち方・音の出 方をし、大切に使う 曲のイメージを感じたり、身体で表現しようと する(歌い方・楽器・語り・身体表現など)
運動遊び	体操 ・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	・4歳児を誘って一日の始まりに体操を動かす ・フープまわし・マット遊び(前転・側転) 友達と一緒に体操をする(はとぼろぼ・エビコノクなど)・4歳児と一緒にする	健康に過ごす為、1日の始まりに体操を体よく したり動かしたりする 色々な固定道具や用具の正しい使い方を 安全に使う(振り方持ち方・結び方付け方 など) 器械で前回り・足掛け前回り・逆上がりをする 短縄で前回り・後ろ回り・後ろがとどける 長縄でいろいろな遊びをする
言葉遊び	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	言葉遊び 絵本の読み聞かせ (しりとり・なぞなぞ・伝言ゲーム) ・ALTによる「英語で遊ぼう」	文字や数に関心を持つ
食育	給食 友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や保育者と一緒に楽しく食事をする ・当番活動について話し合ったり取り組んだり、4歳児の手伝いに進んでいく	友達や教師と一緒に楽しい園生活の中で美味 しく食べる経験を重ねる 色々な行事を通じて、食べ物のいわれや意味 を知り、味わって食べる
栽培活動	・ソフマイモの苗植え	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	・収穫した野菜を家庭に持ち帰り、料理に使う	栽培活動や園外活動などを通して、食への感謝 の気持ちを持ち、大切に思ったり、苦手 なものも食べようとする
その他	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び	・小学校のプールで水遊び

児童が主体性や創造性を発揮して取り組む 学校図書館活動についての研究

撫養小学校，黒崎小学校，鳴門西小学校，椿小学校

05

幼児教育コース・児童図書室長

塩路 晶子

鳴門教育大学名誉教授

佐々木宏子

前児童図書室担当者

森下 雅子

鳴門市立図書館認定NPO法人ふくろうの森

吉成 悦子

鳴門市学校図書館サポーター・鳴門中学校・黒崎小学校担当，四国大学非常勤講師

恵美 純子

椿小学校

清水 愛

鳴門市学校図書館サポーター・撫養小学校担当・児童図書室司書

川上 稚草

鳴門市学校図書館サポーター・鳴門西小学校担当

庄司 陽子

鳴門西小学校

大野 実緒

研究事業の概要

学校図書館においては児童自身が好きな図書を選んだり，教科学習に用いられたいしている。児童は一人で，また友達とのやりとりを通して，どのような問いを生み出し考え，自らの言葉で表現しているのだろうか。本研究では狭義の「読書」にとどまらず，図書を用いたさまざまな学習活動のなかで児童にどのような方法を提起すれば，主体性や創造性を発揮しうるかを明らかにすることを目的とする。

具体的な取り組み

小学校の学校図書館において，鳴門市学校図書館サポーターが中心となって図書を用いた学習活動を行い，児童の学びの姿を記録する。とくに，児童に好まれる図書を中心に議論をする機会をもうけ，子どもたちがその過程でどのような問いや論理展開で思考を高め，共有するのかを確認する。併せて小学校教員等に学校図書館の利用等についての聞き取りを行う。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

小学校の学校図書館に，児童が選書した図書や学習活動に生かすことができる図書を配置した。

鳴門市学校図書館サポーターや教員が，図書を用いた活動を小学校の学校図書館等において実施した。また小学校教員や教員を目指す学生に学校図書館活用のための研修を実施した。

アウトカム（短期的成果）

学校図書館において図書を用いた様々な新しい視点からの活動を提案し，その活動の違いにより子どもの中にどのような思考方法や創造性・主体性が育まれるかを明らかにすることをめざした。

鳴門市学校図書館サポーターや小学校教員を中心に，学校図書館における図書を用いた活動を読書アニメーションとして実施した。アニメーションとは，もともとフランス発祥で「その基底に教育よりもさらに広範な人間性と自己実現に関する捉え方を有する広義の概念」（脇田 2014）であるが，その後スペインにおいて「読書へのアニメーション」として読書指導に焦点をあてて展開されている。日本においてはこの「読書へのアニメーション」が紹介されることが多い（足立 2018 など）が，本研究における読書アニメーションとは，児童が楽しみながら図書を用いた活動に取り組み，児童が主体的・対話的・協同的に考え表現することを促すものであると定義する。今回実施した学校図書館活動は大きく6つに分類することができた。

1. 「図書館利用の方法を学ぶ」では4月から6月にかけて，「としょかんたんけん」など学校図書館利用のオリエンテーションを行い，児童が自ら選んだ図書を用いたブックトーク，図書館クイズなど，図書の新しい可能性を

ノンフォーマル教育における 数学の本質性と学際性

鳴門市教育委員会

06

数学科教育コース 山中 仁
鳴門市教育委員会 学校教育課 上塚 牧雄
数学科教育コース 藤原 大樹
数学科教育コース 早田 透

鳴門市教育委員会 学校教育課 梶原 真
数学科教育コース 秋田 美代
数学科教育コース 田中 晴喜
数学科教育コース 宇田川陽一

研究事業の概要

複雑化していく現代社会において、数理科学に基づいた意思決定を行える人材を育成することが求められている。またそのためには、子どもの数学力を高めることが肝要である。一方、カリキュラムが具体的に決められているフォーマル教育においては様々な条件と制約があり、発展的な内容や学際的な活動を取り入れることは容易ではない。そこで、2024年度に開催した鳴門市教育委員会と数学科教育コース教員による「鳴門理数塾」を活用し、ノンフォーマル教育の形で数学の体系性とSTEMの双方を学べる場を提供することで、数学の本質性と学際性双方に対する子どもの認識を深めることを目指す。

具体的な取り組み

2024年度末に鳴門市教育委員会と数学科教育コースの教員で行った鳴門理数塾に関する検討会をもとに、参加者を鳴門市全体から募集し、以下の日程で鳴門理数塾を開催した。

- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| 第1回 2025年6月21日 | 第2回 2025年7月26日 | 第3回 2025年8月2日 |
| 第4回 2025年8月24日 | 第5回 2025年9月20日 | 第6回 2025年10月19日 |
| 第7回 2025年10月19日 | 第8回 2025年12月27日 | 第9回 2026年1月25日 |
| 第10回 2026年3月15日 | | |

なお、鳴門理数塾の様子は数学科教育コースのホームページと鳴門市ホームページの双方にて報告している（QRコード参照）。



数学科教育コースホームページ 鳴門市ホームページ（鳴門理数塾）

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1. 鳴門理数塾の開催

月一回のペースで鳴門理数塾を開催し、子どもが数学の本質性と学際性の双方を感得できるよう、数学に関する講義とSTEMに関する講義の双方を行った。前者においては数学的な考え方を主軸に、後者については理科等の他教科の活用を主軸



図1



図2

にした活動を行ってもらった。図1は数学に関する講義の様子、図2はSTEMに関する講義の様子である。

2. 数学の本質性と学際性に関する理解を深めるための教材の開発

数学の体系性は数学の本質性を象徴する概念であるが、指導者からの一方的な問題解説では体系を活用する力は身につけにくい。鳴門理数塾では90分かけて1つのテーマについて体系を構築する講義を行った。図3はパスカルの三角形とよばれる図の一部である。パスカルの三角形は正の整数のたし算だけで取り組める教材であるが、ホッケー・スティックの定理のような帰納的推論が活かせる定理やそれを活用した様々な数の和の計算法があり、体系性の理解に適した題材である。鳴門理数塾第6回において、パスカルの三角形を用いた講義を行った。

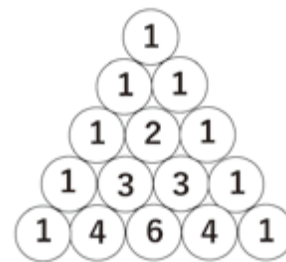


図3

数学の学際性に関しては、STEM教育に関する教材を提供した。理科の知識や、紙やはさみといった工具、手持ちの携帯型端末のライト機能や生成AIなど、数学以外の知識も用いて問題を解決する態度を育成する教材として、デザイナーズホームに天窓を設置するための設計図や顧客への説明（その天窓がどう良いのか）を考える教材を開発した。鳴門理数塾第4回において、この教材を用いた講義を行った。



図4

3. 数学検定試験の受験に対するサポート

数学検定試験の受験料1回分の支援、数学検定テキストの配布、数学検定対策講座の開講の3つを通して、数学検定合格に向けたサポートを行った。図4は数学検定対策講座の様子である。

4. YouTube動画を活用した学習支援

数学科教育コース教員の一人が運営しているYouTubeチャンネル「NaruMathチャンネル」に鳴門理数塾で出題したチャレンジ問題の解答の一部をアップすることで学習支援を行った。図5はその画面である。

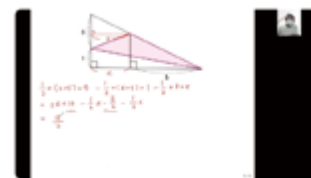


図5

アウトカム（短期的成果）

- ・週末及び夏季休暇に鳴門理数塾を開催することで、子どもが参加しやすいようにした。その結果、毎回一定の人数が鳴門理数塾に参加した。
- ・毎回、講義終了後にアンケートを行い、内容の面白さ等を5点形式で回答してもらった。その結果、多くの子どもが「面白い」と回答した。
- ・数学検定試験のサポートを行った結果、参加者の多くが数学検定試験に合格した。
- ・毎回チャレンジ問題を出題し、一部についてはYouTubeを活用した学習支援を行うことで、時間外でも難しい課題に取り組む意欲の向上が見られた。

インパクト（波及効果）

1. 次年度への継続と参加人数の拡大

・鳴門市教育委員会と数学科教育コースの連携事業として令和5年度に開始した鳴門理数塾であるが、今年度、参加人数の増加に成功し、アンケート調査から興味・関心を高める効果があったことが確認されたため、次年度も活動を継続することが決定した。また、次年度は参加人数を拡大することが決定しており、さらなる波及効果が期待される。

2. 大学院生による補助

・今年度は参加人数が昨年度よりも多かったため、鳴門市教育委員会からの依頼の形で、数学科教育コースの教職大学院生による補助を実施した。鳴門理数塾は公立中学校の子どもが参加しているが、鳴門理数塾で扱っている比較的高度な内容に子どもが取り組んでいることを目の当たりにすることで、子どもたちの創造性に関する認識を改めるよい機会となった。

中学校数学の理解・思考に基づいた 数学的に説明する力を育成する 課題設計原理の開発

徳島県教育委員会，徳島市応神中学校，上板町立上板中学校

07

数学科教育コース 藤原 大樹
徳島市応神中学校 森本 実佑

徳島県教育委員会 義務教育課 石川 和義
上板町立上板中学校 瀬尾 智陽

研究事業の概要

中学校数学科では数学的に説明する力の育成が課題であり，徳島県も例外ではない。そこで，徳島版読解力に包含されるこの力を育成する授業を教員が効率よくデザインし，効果的に実施できるよう，授業の課題設計原理を開発する。

具体的な取り組み

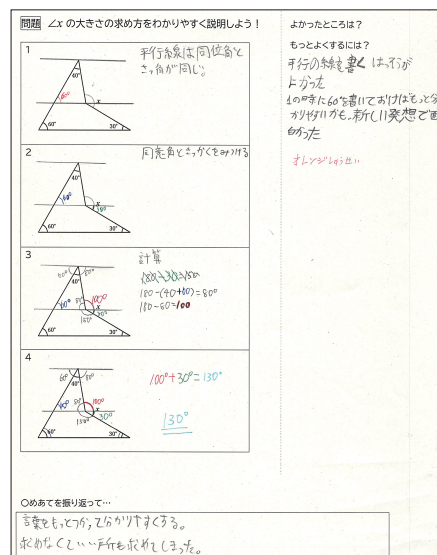
- ①図形の論証の初期学習における「事柄が成り立つ理由を演繹的に説明する力」に焦点化し，数学教育学の知見を基に課題設計原理（次頁）を仮設定し，学習指導案，ワークシート（WS），質問紙の原案を開発する。
- ②上記原案について，生徒の実態や反応予想，ICT活用等の視点から協議する。
- ③研究授業と調査を実施する。大学のビデオカメラで授業記録，AI搭載録音ツールでプロトコル作成を行う。
- ④効果検証の分析を行い，その結果と分析・考察の内容を協議して，その結果を報告書に整理する。
- ⑤研究会等での研究発表，研究会等での研究成果の普及を適宜行う。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

仮設定した原理1に基づき，説明の全体を「4コマ漫画」風に分解して表現する通称「4コマ説明」のWS（右図）を開発した。原理2に基づき，「凹四角形の角の和」の課題を扱い，原理3に基づき，生徒が相互評価して改善を促す記入欄をWSに設けた。

研究授業を県内公立中学校2校で実施し，WSを1校目では紙で，2校目では協働学習アプリ上で生徒は使用した（研究授業に小中教員，指導主事，学生が計20名以上参加）。生徒は説明する力を伸ばすことができた。

11月に県外での研究会で研究成果の一部を発表した。参加教員の多くが本研究の取組に共感し，更なる発展アイデアの提案，追試の希望が複数あった。



アウトカム（短期的成果）

仮設定した課題設計原理に基づく授業研究（2校）から、次の成果が得られた。

①ほぼ全生徒が理由の説明を概ね記述できた。

WSには、苦手意識をもつ者を含め、92.9%の生徒が事柄が成り立つ理由の説明を概ね記述できた。生徒には根拠として「三角形の外角の性質より」などの図形の性質を記述しない傾向などがあり、個々に継続的な指導が必要であるといえる。

また、本時では説明において、成り立つ事柄とその根拠を明確にして表現することを重視し、辺や角などは矢印、●印、色分けなどを用いて示す方法を許容したが、生徒の個々の状況に応じて $\angle BCD$ などの表し方の使用を促していく必要がある。

授業中に記述し終えなかった生徒が2つの授業で計3名いたが、既習事項に基づいて演繹的に粘り強く考え、説明を記述しようと挑み続ける様子が観察された。

②開発した本WSは生徒の説明の構築支援と心理的負担の軽減に効果があった。

質問紙調査では、本WSの効果意識は、自己の思考・記述に対して77.2%、他者の思考・解釈に対して89.5%の生徒が肯定反応を示した。思考・解釈に役立った理由に「1こま目と比べることでどこを説明したいかがよくわかったから」と書いた生徒もいた。また一般に、図形の論証は生徒から不人気傾向があるが、本WSを用いた説明の楽しさについて96.9%の生徒が肯定反応を示した。以上により、事柄が成り立つ理由を部分的かつ丁寧に扱う本WSと授業展開が、図形の証明の初期学習に取り組む生徒の説明の構築支援と心理的負担の軽減に有効であることが示唆される。

③得意な生徒の一部には、説明を分割して表現することが煩雑に感じられ得る。

質問紙調査では、少数ではあるが得意意識をもつ生徒の中には、説明の全体を分割して表現することに煩雑さを感じる可能性が窺えた。事柄が成り立つ理由の説明に本WSを使用する授業と使用しない授業を接続して単元を構成したり、生徒の実態や希望に応じてWSを変えたりするなど、今後検討していく必要がある。

④本WSは授業者の机間指導での評価活動に役立てられる。

授業者インタビューからは、机間指導で授業者が生徒個々の説明の質を瞬時かつ的確に評価する上で、本WSが役立つことがわかった。

以上により、2つの授業研究を通して、図形の論証の初期学習において事柄が成り立つ理由を説明する力を育成する課題設計原理として次の3点を開発した。

【原理1】 説明に含まれる「事柄とその根拠」を複数に分割して表現させる。

【原理2】 理由の説明が多様に想定される課題を扱う。

【原理3】 生徒が互いの説明を読み、評価・改善する場面を設ける。

インパクト（波及効果）

①授業者は、図形の論証の初期学習の授業で、事柄が成り立つ理由を演繹的に説明する力を育成するための教材研究を、上記の原理に基づくことで短時間で効果的に計画・実施できる。本WSをアレンジするなど、新たな実践の開発も期待される。

②研究者及び共同研究者による、全国規模の学会発表や徳島版読解力に関わる研修会・学校訪問等での普及活動等（PDFのパンフレットや指導案、本WSを使用）を予定しており、さらなる広がりが期待される。

③次年度では本研究を踏まえ、単元を通した中長期的な学習指導に焦点を当て、生徒の状況に応じた本WSの活用効果等を実証するために予算化を計画している。

コミュニケーションを図る素地 及び基礎となる資質・能力を育む 小学校外国語教育

徳島県小学校教育研究会 外国語部会

08

小学校英語教育センター 山森 直人

小学校英語教育センター 佐藤美智子

小学校英語教育センター 竹内 陽子

小学校英語教育センター 庄司 晶代

徳島県小学校教育研究会 外国語部会 平山 康史

東みよし町立足代小学校 外国語教育に携わる教員

研究事業の概要

徳島県小学校教育研究会外国語部会の研究主題「コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育」にもとづく、実践研究を協力・支援する。

具体的な取り組み

外国語部会の研究内容（下記）について、教員研修、授業研究会、勉強会等を通して協力・支援する。

- (1) 実態に応じた年間指導計画や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり
- (2) 目指す資質・能力を育成するための言語活動
- (3) ICT等の効果的な活用

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

○研究主題に関する会合における指導・助言および勉強会等の開催

- ・徳島県小学校外国語部会の役員会や主題研究会において、研究主題への共通理解を図り、学習指導要領の改訂の方向性など、今後の外国語教育に関する国の動向についての情報提供等を行った。
- ・「児童自らが目的意識・相手意識をもち、主体的に関わり合う言語活動を通して、資質・能力を育む」ことを目指して、特に中学年における授業づくりについて、対面及びオンラインで幾度も話し合う機会をもった。

○徳島県小学校外国語教育研究大会に向けた外国語教育の授業開発及び授業実践への支援

- ・校内の研究授業並びに模擬授業で、「言語面」と「内容面」に重点を置き、言語活動を積み重ねていくことの重要性について対面及びオンラインで幾度も話し合う機会をもった。
- ・オンラインによる指導案検討会を実施し、授業者や関係教員に単元の最終ゴールやそれに向かう毎時間のめあて、評価等について助言を行った。
- ・タブレット端末を活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実、目指す資質・能力を育成するための言語活動の充実に向けた授業づくりについて指導助言した。

○徳島県小学校教育研究会外国語部会の研究成果の公表と共有の支援

- ・令和7年11月21日に開催された「第6回徳島県小学校外国語教育研究大会」中学年部会の公開授業についての指導助言を行った。

・徳島県の外国語研究主題について、外国語部会、並びに当該学校教員に指導助言を行った。

アウトカム（短期的成果）

次の3点に関する授業開発や教員の力量形成

(1) 実態に応じた年間指導計画や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり

徳島県小学校外国語教育研究大会を通じて、当該学校の研究成果を公表することにより、県内の小学校教員に、学習指導要領に即した外国語教育の基本的な取り組みや外国語教育の今後に関する情報を共有することができた。

(2) 目指す資質・能力を育成するための言語活動

当該学校の研究テーマとしている「主体的に関わり合う言語活動」について考える機会をもち、言語活動の重要性や具体的な活動方法を提供し、目指す資質・能力の育成について共有することができた。

(3) ICT等の効果的な活用

タブレット端末を活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実や、目指す資質・能力を育成するための言語活動の充実を図る授業づくりの実演がなされ、その具体的な方法を県内教員と共有することができた。

インパクト（波及効果）

- ・令和7年度開催の徳島県小学校外国語教育研究大会を通じて得られた、当該学校の研究成果を公表、共有したことは、徳島県内の教員の外国語指導力の向上に加えて、小学校児童の英語によるコミュニケーションを図る資質・能力の向上に寄与するものとする。
- ・本年度の成果や課題等を、今後、小学校英語教育センターのシンポジウムや「学びの広場」（オンラインによる外国語指導についての勉強会 令和7年9月から月2回程度開催）、地域や学校の研修会を通して発信することにより、小学校教員に先駆的な取り組みに関する情報の提供ができる。

上記の取り組みを通して、小学校英語教育センターの「小学校外国語教育支援ネットワーク」を基盤とする人材育成と地域支援のさらなる充実を図ることができる。



4年生の授業



やり取り（4年生）



5年生の授業

佐那河内村英語教育戦略ビジョンにもとづく外国語教育の推進

佐那河内小中学校

09

小学校英語教育センター 山森 直人
小学校英語教育センター 竹内 陽子

小学校英語教育センター 佐藤美智子
小学校英語教育センター 庄司 晶代
佐那河内小中学校 堀井 晴美 ほか

研究事業の概要

「豊かな国際感覚と確かな英語力を身に付け，自ら表現し，発信する人材の育成～保育，学校教育，社会教育が連携し，15年間の英語教育の組織的推進を通して～」を基本目標とする第Ⅱ期佐那河内村英語教育戦略ビジョンにもとづき，佐那河内小中学校の外国語（英語）教育に係る教員の指導力および授業の充実を図る。

具体的な取り組み

1. 佐那河内村英語教育運営委員会への出席
2. 英語教育の①小中連携の強化，②教員研修の充実，③指導と評価の一体化を踏まえた授業づくりの推進，④ ICT 機器を効果的に活用した授業づくりの推進，⑤環境の充実（人材，教室掲示，教材，ICT 機器等）を図る。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1. 佐那河内村英語教育運営委員会への出席（具体的な取り組み 1, 2-①）

令和 7 年 6 月 30 日，令和 7 年度第 1 回佐那河内村英語教育運営委員会に出席し，令和 6 年度のまとめと令和 7 年度の行動計画を共有するとともに，令和 7 年度の取り組みについて助言する機会をもった。また，令和 8 年 2 月 27 日に第 2 回の同委員会が開催され，本年度の取り組みの総括を行った。

2. 授業開発及び授業実践等の支援（具体的な取り組み 2-③④⑤）

- ・「外国語」における学習者用デジタル教科書を活用した先進校の実践事例について，担当者に情報提供をした。
- ・外国語専科による中学年の授業について，授業参観，研究協議を行い，授業改善のための助言をした。
- ・学級担任による高学年の授業について，外国語専科教員とともに指導案を検討し，授業参観，意見交換を行った。
- ・発話の助けとなる表現をまとめたコミュニケーションカードの作成を支援し，個人所有のものや掲示物等，環境を整えた。
- ・同校と鳴門教育大学小学校英語教育センターで相談し，児童の作成した単元計画表や振り返り，授業の記録，指導者の感想を検証し，取り組みについて助言した。
- ・全国小学校英語実践研究大会第 2 分科会での発表に向けて，外国語担当者と協議を繰り返し，「主体的に学び，自分の考えや気持ちを表現する児童の育成」について，様々な視点から見直し，よりよい授業の在り方を助言した。

3. 英語教育関連行事の支援（具体的な取り組み 2-⑤）

- ・ これまでも企画・実施を支援してきた佐那河内英語村が開催された。

4. 情報提供（具体的な取り組み 2-②④）

- ・ 鳴門教育大学小学校英語教育センター主催のシンポジウムやまなびの広場（オンラインによる外国語指導についての勉強会 令和7年9月から月2回程度開催）等の開催について、いち早く情報提供し、参加を促し啓発に努めた。
- ・ 学習者用デジタル教科書研究の協力校に引き続き指定し、発表の場を設定した。また、当該校が取り組んできたことを発信することにより、他校の実践に生かせるようにした。

アウトカム（短期的成果）

1. 指導と評価の一体化を踏まえた授業づくり（具体的な取り組み 2-②③④）

- ・ 昨年度実施した、「複線型授業」を改善し、児童に「委ねる」取り組みについて検証した。指導者が、個別、協働、全体と様々な授業形態を随時適切に行うことにより、学習が深まり、内容の定着が図られた。
- ・ パフォーマンステスト、ペーパーテストの評価から個々の児童の成長や課題を個別指導および全体指導に活かすことを通して、授業改善が図られた。

2. ICT 機器を効果的に活用した授業づくり（具体的な取り組み 2-②③④）

- ・ 5年生のある児童は、それまで外国語学習に消極的であったが、学習者用デジタル教科書を活用し進んで語彙の習得に取り組むようになり、友達との「やり取り」でも、積極的に英語を使う姿が見られた。他の児童にも同じ効果が波及している。

3. 成果の公表

- ・ 全国小学校英語実践研究大会第2分科会（令和8年1月31日）で、「主体的に学び、自分の考えや気持ちを表現する児童の育成」をめざした授業について、発表した。

インパクト（波及効果）

1. 小学校英語教育センターによる外国語教育への支援を通して、佐那河内小学校・中学校の児童・生徒の英語力、および英語によるコミュニケーション力の向上に加えて、教員の外国語指導力の向上に寄与するものとする。
2. 上記の成果や課題等を、今後、小学校英語教育センターのシンポジウム、学びの広場（オンラインによる外国語指導についての勉強会 令和7年9月から月2回程度開催）、あるいは地域や学校の研修会を通して発信することにより、地域の小学校教員に先駆的取り組みに関する情報の提供ができる。
3. 上記の取り組みを通して、小学校英語教育センターの「小学校外国語教育支援ネットワーク」を基盤とする人材育成と地域支援のさらなる充実を図ることができる。



語彙表現の確認



授業の風景

高等学校普通科におけるスマート農業を 題材とした課題探究活動に関する研究

徳島県立徳島北高等学校

10

技術・工業・情報科教育コース 宮本 賢治
徳島北高等学校 渡邊 拓斗
徳島北高等学校 山尾 香織
技術・工業・情報科教育コース 米延 仁志

徳島北高等学校 宮本 宏美
徳島北高等学校 竹内 直生
徳島北高等学校 岡林 和弥
技術科教育コース 学部4年 山田 昂汰

研究事業の概要

徳島北高校では今年度から、地域社会の課題を発見・設定し、魅力ある地域社会づくりの方策を探究する活動に全学的に取り組んだ。これは8つのプロジェクトから成り、そのうちの「プロジェクトⅣ スマート農業プロジェクト」については、本学の教員・学生による講義・指導・支援の下、共同で進めた。本研究ではプロジェクトⅣの参加者を1)画像解析による野菜の成長モニタリングする栽培班(26名,9班)と,2)マイコンボードを活用したスマート農業システム装置の製作するプログラミング班(36名,11班)に大別して,活動を行った。

具体的な取り組み

徳島北高校での活動日(45分×1コマ)は以下の通りである。

3年生:4/15, 25, 5/1, 13, 27, 6/3, 17, 7/8, 9/16, 25, 30

2年生:4/15, 25, 5/1, 13, 27, 6/3, 17, 24, 7/8, 9/16, 25, 30, 10/7, 28, 11/4, 11, 18, 12/16, 1/13, 20, 27

*1年生は10/28から活動に参加した。

また別途,7/27に鳴門教育大学の共同実験棟2階にて,害鳥撃退システムの配線接続を行った(午前9時~午後2時半)。

各班の具体的な取り組みは以下の通りである(図1参照)。

1) 栽培班:

中庭でバジルを栽培し,一眼レフカメラにて撮影した。撮影した画像から画像解析用ライブラリのOpenCVを活用して,HSV色空間スペクトルを解析した。解析により得られた色相H=74~80の画素数の平均値の日数変化をロジステック回帰曲線にあてはめて,バジルの成長曲線を構築した。この成長曲線から成長モニタリングや収穫期の予測が可能であることを確認した。

2) プログラミング班:

カラスやハトなど非常に鳥が多く,栽培に支障をきたす恐れがあるため,今年度は害鳥撃退システムを製作した。マイコンボードと赤外線センサー,電子ブザー,LEDフラッシュライトを用いて,鳥が近づくと1)電子ブザーが警告音を発する,2)フラッシュ光を発す

班	活動内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
栽培班	ガイダンス	■									
	観察・画像撮影		■	■	■						
	画像解析・成長曲線構築 まとめ・成果発表会準備				■	■	■	■	■	■	■
プログラミング班	ガイダンス	■									
	Arduino実習		■	■							
	害鳥撃退システム製作 まとめ・成果発表会準備				■	■	■	■	■	■	■

図1 2,3年生の活動内容

ることで撃退する仕組みとした。このシステムに関するプログラミングや電子部品配線等を行った。

各班の取り組みの様子を図2に示す。



図2 各班の取り組みの様子 (左図：栽培班 右図：プログラミング班)

アウトプット (研究対象に提供されたサービスなど)

- ・本学の教員と学生により、バジルの栽培や、HSV 色空間を用いた画像解析と成長曲線の構築、マイコンボードやセンサーの使い方、害鳥撃退システムの製作に関する講義・指導・支援を行った。
- ・一眼レフ付きデジタルカメラやマイコンボード、電子部品、WEB カメラ等の本研究活動に必要な物品を高校側へ貸与した。また大学側で用意した講義資料も高校側へ提供した。

アウトカム (短期的成果)

- ・本活動を通して、参加した高校生が 1) HSV 色空間を活用した画像解析による成長モニタリングと収穫予測のための成長予測曲線の構築と 2) マイコンボードと人感センサー・電子ブザー・LED フラッシュライトを活用した害鳥撃退システムの製作ができた。
- ・上記の成果をまとめて、農林水産省主催の第2回みどり戦略学生チャレンジへ初めて応募した。提出したポスターを図3に示す。
- ・本研究成果を一般社団法人 日本産業技術教育学会 第41回四国支部大会(12/13, 愛媛大)で口頭発表した。



図3 第2回みどり戦略学生チャレンジへ提出したポスター

インパクト (波及効果)

- ・課題探究学習や AI・データ科学等の最新の科学技術に対する生徒の取り組み意識・技能・能力の向上が図れたと考えられる。
- ・課題探究学習や AI・データ科学等の最新の科学技術に対する高校教員の指導力が向上したと考えられる。今後、数理・データ科学・AI 教育の行える学校教員の育成を図ることが期待できる。
- ・今後、本支援・指導の他の普通科高校や専門高校への普及が期待される。

徳島県内のスーパーサイエンスハイスクール 指定校における課題研究の支援体制の構築

徳島県教育委員会

11

理科教育コース 早藤 幸隆

研究事業の概要

徳島県内のスーパーサイエンスハイスクール指定校及び徳島県教育委員会において、全国レベルの課題研究を実践することが喫緊の課題として要望されている現状がある。この背景として、課題研究における高校教員の指導力の向上が課題として求められている。そこで、鳴門教育大学を中核機関として、徳島県内のスーパーサイエンスハイスクール指定校と徳島県教育委員会と協同・連携して、理数系領域に意欲と才能を有する高校生を対象に、カスタムメイド且つ実証性を有する課題に応じた研究支援を実施することで、科学者としての目的意識と将来像を備えた、社会貢献を伴う未来の科学者の養成に繋がる支援体制を構築する。

具体的な取り組み

- ①理数系領域に意欲と才能を有する高校生に、科学者としての目的意識と将来像を備えた、社会貢献を伴う未来の科学者の養成に繋がる支援体制の構築を目指し取り組んだ。
- ②徳島県内のスーパーサイエンスハイスクール指定校と徳島県教育委員会と協同・連携して、理数系領域に意欲と才能を有する高校生を対象に、カスタムメイド且つ実証性を有する課題に応じた研究支援を実施した。
- ③高校生の科学や技術に関するキャリア意識を高めると共に、科学・技術の創造に関わる意欲を伸張させ、理数系を目指す進路選択の推進を図ることを目指した。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

課題研究における指導は、対象校の課題研究担当教員との間で事前に綿密な打ち合わせを実施した。課題研究を実施する生徒の興味・関心の高いカスタムメイド且つ再現性・実証性を有するテーマを面談により決定し、研究指導を行った。課題研究の指導は、数ヶ月に数回程度（主に土日又長期休暇中は、実施回数を増加）とし、生徒の研究進捗を見極めながら、支援体制の構築を目指した。主な研究実施場所は、対象校の実験室とし、課題研究に伴う施設・設備が必要な場合は鳴門教育大学で実施した。

◆その他

課題研究の分野・領域、テーマなどにより異なるが、自宅等での研究活動として、課題に関する演習の継続、実験結果における実験ノートへのまとめとデータの解釈、測定実験の数的処理、分析機器のスペクトルデータの解析、課題研究担当教員から配布された文献資料のまとめ等を実施し、随時研究支援を行った。

アウトカム（短期的成果）

課題研究の支援体制の構築においては、課題研究実施中に定期的に生徒との面談を行い、研究の進捗状況や生徒の意欲・能力等を確認し、継続的に対応可能な状況を維持した。また、課題研究担当教員と鳴門教育大学との間で課題研究の進捗を把握

し、支援体制の改善に努めた。更に、課題研究の成果発表として、徳島県 SSH 生徒研究合同発表会及び専門分野における学会発表に向けて、生徒は支援・指導を受けながら、研究成果の輩出を促進させた。本事業は、研究デザインの実現を目的として、課題研究における支援と共に、以下の研究課題を推進した。

アウトカム（課題研究における支援）

○ハロゲン置換インジルピンを用いた新規化合物の合成

5-ヨードインジルピンと4-置換（NO₂, OCF₃, OCH₃, N(CH₃)₂）フェニルボロン酸とのクロスカップリング反応から得られる4'-置換（NO₂, OCF₃, OCH₃, N(CH₃)₂）-5-フェニルインジルピンを合成すると共に、その電気化学的評価として、サイクリックボルタノメトリーにおける電気化学的な特性及び紫外可視吸収スペクトルにおける光学的な特性を検討した。4'-置換-5-フェニルインジルピンは、530nm 付近にほぼ同様の極大吸収波長を示す赤紫色素としての発色特性が明らかとなった。また、4'-置換-5-フェニルインジルピンは、5-ヨードインジルピンと比較し、極大吸収波長における吸光度が低下する淡色効果を確認した。一方、電子求引性基を有する4'-NO₂-5-フェニルインジルピン及び4'-OCF₃-5-フェニルインジルピンのサイクリックボルタノグラムでは、非水系（アセトニトリル）の反応場で非可逆的な酸化還元波を示し、電気化学的な酸化還元特性が評価された。

○クマリン化合物の蛍光特性に関する研究

アオダモ樹皮の蛍光成分の特定と共に、ヒドロキシ基一置換及びヒドロキシ基二置換クマリンを用いて、蛍光特性を検討した。アオダモ樹皮の水：エタノール＝1：1の抽出エキス蛍光成分を探索し、エスクレチン及びその配糖体であるエスクリンを単離し、機器分析スペクトルの解析により、その構造を決定した。また、ヒドロキシ基一置換及び二置換クマリンを用いて、励起光（345, 350, 355, 360nm）照射下で蛍光スペクトル（380nm～600nm）を測定し、ヒドロキシ基一置換の蛍光強度は、7-ヒドロキシクマリン>3-ヒドロキシクマリン>4-ヒドロキシクマリン>6-ヒドロキシクマリンの順に大きくなり、7位のヒドロキシ基が蛍光に強い影響を及ぼすことが明らかとなった。一方、ヒドロキシ基二置換の蛍光強度は、4,7-ジヒドロキシクマリン>6,7-ジヒドロキシクマリン>7,8-ジヒドロキシクマリンの順に大きくなり、4位と7位のヒドロキシ基が蛍光に強い影響を及ぼすことが明らかとなった。

○イソインジゴ誘導体の化学的評価

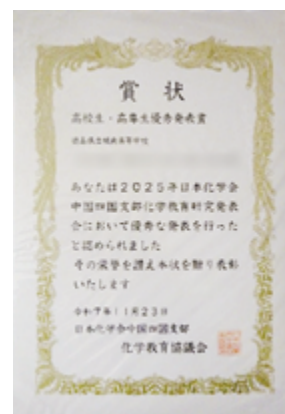
1-メチルイソインジゴにおける芳香環の5'位を化学修飾した1-メチル-5'-(H・NH₂・OCH₃・NO₂・COCH₂Cl)イソインジゴ誘導体を合成すると共に、その化学的評価として、紫外可視吸収スペクトルにおける光学的な特性及びサイクリックボルタノメトリーにおける電気化学的な特性を検討し、5'位の電子求引性の基効果及び橙色色素の可視吸収特性から、電気化学的な酸化還元特性を評価した。

○1-置換イソインジゴの光物性評価

1-置換イソインジゴ誘導体の合成と共に、光物性評価として、紫外可視吸収スペクトルにおける光学的な特性及びサイクリックボルタノメトリーにおける電気化学的な特性を検討した。1-置換イソインジゴは、¹H-NMR スペクトルの解析の結果、各々の分子構造に由来するシグナルをアサインした。また、紫外可視吸収スペクトルでは、480nm 付近に同様の極大吸収波長を示す橙色色素としての光学的な特性が明らかとなった。更に、サイクリックボルタノグラムの解析により、非可逆的な酸化波を観測すると共に、1-メチルイソインジゴが最も高いピーク電流を示したことから、分子構造における平面性保持と共に、電子供与性の置換基効果が示唆された。

◆本事業の成果

- | | |
|---|----|
| ○第68回日本学生科学賞徳島県審査（高校の部）優秀賞（徳島県教育長賞） | 1件 |
| ○第69回日本学生科学賞徳島県審査（高校の部）優秀賞（徳島県教育長賞） | 1件 |
| ○令和5年度徳島県SSH生徒研究合同発表会 優秀賞（口頭発表） | 1件 |
| ○令和6年度徳島県SSH生徒研究合同発表会 優良賞（ポスター発表） | 1件 |
| ○令和6年度徳島県SSH生徒研究合同発表会 奨励賞（口頭発表） | 1件 |
| ○2025年日本化学会中国四国支部大会（香川大会）における高校生優秀発表賞 | 1件 |
| ○2025年日本化学会中国四国支部大会（香川大会）における研究（ポスター）発表 | 5件 |



インパクト（波及効果）

理数系領域に意欲と才能を有する高校生には、For Excellence（“創造的知”）を中核に裾野を広げて For All（平等教育）に連なる先進的な科学技術と共に、カスタムメイド且つ再現性・実証性を有する研究テーマに応じた研究支援を進める必要がある。これらの鍵を握るのは、児童・生徒の人間の成長と基礎学力の育成に重要な役割を果たす質の高い教員の養成である。その教員養成の中心となるのが教員養成系大学である。本研究の主な波及効果として、教育学系と理工学系（教育の世界と研究の世界）の協同・連携を基に、科学的・技術的な思考力・判断力・表現力を育む科学研究の場の提供と共に、それらを有効に活用した実践的検証を持続的に推進できる組織体制の構築が可能となると考えられる。

特別支援学校の自立活動やキャリア教育を主とした活動の充実を広げる取り組み

徳島県立阿南支援学校，徳島県立みなと高等学園

12

特別支援教育コース

徳島県教育委員会 特別支援教育課

徳島県立総合教育センター特別支援・相談課

徳島県立阿南支援学校 中学部

徳島県立阿南支援学校 高等部

小倉 正義
岡田 祐介
白糸 史枝
伊成登志子
梶 涼夏

特別支援教育コース

徳島県教育委員会 特別支援教育課

徳島県立阿南支援学校 中学部

徳島県立阿南支援学校 高等部

徳島県立みなと高等学園

徳島県立みなと高等学園

岩崎 伸浩
小川 聡太
後山 真吾
志摩 遥
山崎 美貴
森影三千世

研究事業の概要

特別支援学校における自立活動の充実のためには，教員の専門性の向上や適切なツールの開発が求められる。本年度は，昨年度までの成果も踏まえて，主に阿南支援学校中学部・高等部において自立活動を主とした活動の充実を図るための学校コンサルテーション・校内研修会を実施し，自立活動における教員の指導力・協働力の向上に関する有効性を検討することを第1の目的とする。次に，みなと高等学園において，自立活動の授業への助言や生徒向けに実施されている「就労に関する自分発見チェックリスト」の見直しを行い，より生徒の自己理解を深め，自立やキャリア意識の発達に向けた教育活動につなげることを第2の目的とする。

具体的な取り組み

阿南支援学校中学部・高等部において，自立活動の授業を参観し，授業担当教員とのコンサルテーションを行った。その後，各学部（中学部・高等部）において設定されたテーマをもとに，主として学部（中学部・高等部）教員への研修会を行った。みなと高等学園においては，「就労に関する自分発見チェックリスト」に関して，関係教員で協議を行い，より実態に合った内容に改変する作業を担った。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1 阿南支援学校における学校コンサルテーションの取り組みと流れ

6月，中学部2グループの自立活動の授業を参観し，各授業担当教員へのコンサルテーションを行った。その後，自立活動の「人間関係の形成」の区分をピックアップし，「自分や他者理解をどう深め，行動の調整ができていくのかについて」「障害の程度が重度の生徒に対する人間関係の形成をどう指導していったらいいかについて」をテーマとして，主として中学部全体への研修会を実施した。また，自立活動充実のための取り組みについて研究課，学部長と協議した。

9月，高等部2グループの自立活動の授業を参観し，「生徒の実態に応じた目標・内容設定ができるようになりたい」「授業のフィードバックの方法が妥当かどうか知りたい」「今後の授業展開のアドバイスを受けたい」「座学形式の授業に対する生徒の意欲が違うので，適切な対応や言葉かけが知りたい」「授業の内容に少し悩んでいる」といった具体的なニーズに対してコンサルテーションを行った。

11月，中学部2グループの自立活動の授業を参観し，各授業担当者へのコンサルテーションを行った。その後，「色々な感覚刺激に触れられるアイデア」をテーマとして，主として中学部全体への研修会を実施した。

1月，9月に参観した高等部2グループのその後の実践に関する報告を伺い，コンサルテーションを行った。そのうえで，「生徒が授業に参加したくないというときの対応の仕方」についての研修を学部全体で行った。また，中学部の研究課，学部長と自立活動の実践を広げるための取り組みの振り返りや，評価のための教員を対象としたアンケート

トの項目に関する協議を行った。

2 みなと高等学園における学校コンサルテーションにおける取り組みと流れ

8月、12月、2月に分けて、自立活動の授業への助言や「就労に関する自分発見チェックリスト」の見直しを行った。8月には自立活動の授業の振り返りを行ったうえで、「就労に関する自分発見チェックリスト」の見直しのポイントについて協議を行った。12月は、みなと高等学園における協議結果を受けて、削除する項目、現状に分けて追加する項目について議論した。最終的に2月に、新しいバージョンの「就労に関する自分発見チェックリスト」について協議した。

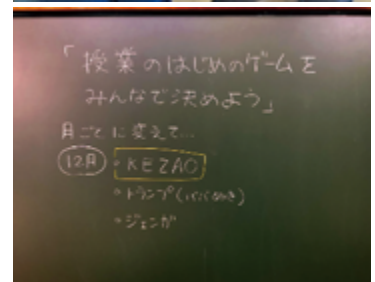
アウトカム（短期的成果）

1 特別支援学校における自立活動の充実と教員の専門性の向上

- ・阿南支援学校中学部・高等部ともに、生徒の実態を踏まえて授業参観を行った後に、授業内容及び生活における自立活動の指導についてコンサルテーションを実施したことで、より授業担当教員からの具体的なニーズに応じたコンサルテーションを実施できた。また、コンサルテーションで協議したことを、学部全体で協議する場があったことで、授業担当教員だけでなく、研修会に参加した教員全体の自立活動に関する専門性の向上に寄与できたのではないかと考えている。

2 自立活動の充実による成果

- ・本稿では、阿南支援学校高等部の実践例をもとに自立活動による成果を報告する。
- ・ある自立活動のグループでは、コミュニケーションの区分の指導でボール渡しゲームやトーキングゲームをする際に、「ボールを渡す時に『どうぞ』、もらう時に『ありがとう』を言うことができる」「提示された2種類のイラストから好きなものを選び、口頭や指差しで伝えることができる」ことを指導目標としていた。
- ・コンサルテーションでは、「『どうぞ』と『ありがとう』が混同しているので、1つずつ指導する、今後の展開では、他の先生に『ありがとう』を言われる場面設定をする」「トーキングゲームの活動で選択肢を増やして選ぶことを目指すより、選択肢を通して『自分の意思を伝える』という活動に繋がるような場面設定をする」こと等を伝えた。
- ・「『どうぞ』のみを指導することで、『どうぞ』と『ありがとう』が混同しなくなった生徒もいた」「自分の貼りたいシールを選ぶ活動」を設定することで『〇〇のシールください』と『自分の意思を伝える』ことができた」などの成果がみられた。



3 自己理解に必要な視点の共有

- ・みなと高等学園において「就労に関する自分発見チェックリスト」について協議することで、担当教員間で生徒の自己理解についての視点を共有することができた。

インパクト（波及効果）

1 学校全体での自立活動の充実

- ・各授業担当者だけでなく、全体で共有する場や研修会を複数回設けたことで、学校全体でコンサルテーションの内容を共有でき、自立活動の充実につながった。
- ・自立活動における中心的課題の共有を行う中で、教員間での連携が促された。

2 教員の生徒理解、生徒の自己理解の促進

- ・実態に即したチェックリストを実施することで、生徒の自己理解を促すだけでなく、実施する側の教員の生徒理解も促進されることが期待される。

3 県教育委員会との連携による指導主事の専門性の育成

- ・学校コンサルテーションへの参加経験を通して、大学教員と共に授業観察や事例研究に参加することで、一連の支援の流れや基本的な技術、知識を得る機会に繋がった。

4 実践研究を県内外に発信する効果の期待

- ・阿南支援学校中学部の実践は県内の「特別支援教育学会」で発表、高等部の実践は県教育委員会主催「実践研究報告会」内で発表が行われる。これにより、県内外の特別支援教育に携わる教員や関係者に実践の成果と知見が共有される。

特別支援学級担任の専門性の向上を図る 学校コンサルテーションの取り組み

鳴門市林崎小学校

13

特別支援教育コース 小倉 正義

鳴門市教育委員会 学校教育課 中妻 佳代

鳴門市林崎小学校 上岡 祐司

徳島県立総合教育センター 特別支援・相談課 坂口 純子

特別支援教育コース 岩寺 伸浩

鳴門市教育委員会 学校教育課 谷 雅美

鳴門市林崎小学校 花補佐美咲

徳島県立総合教育センター 特別支援・相談課 山田 真希

研究事業の概要

特別支援学級において「授業における専門性の向上」などが課題となっており、「学校コンサルテーション」の充実が求められている（徳島県教育委員会特別支援学級運営充実検討委員会，2022）。2年目となる本研究では，徳島県教委及び鳴門市教委，モデル校との連携の下，学校コンサルテーションを実施し，事例研究の成果を検討すると共に，特別支援学級担任間の連携，特別支援学級担任の指導力・実践力の育成，学校コンサルテーションの有効性を検討する。

具体的な取り組み

鳴門市林崎小学校の特別支援学級6学級において，「朝の挨拶行動」についてコンサルテーションを実施した。全教職員に対しては，特別な教育的に支援を必要とする児童の理解推進のための校内研修会を実施した。また，特別支援学級担任に対しては，相互の連携を促進するためのミーティングの実施や個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成・運用のサポートを実施した。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1 学校コンサルテーションの流れ

5月，当該学校の管理職・特別支援学級担任，市教委・県教委の指導主事等，大学教員による事前協議並びに，当該学校の特別支援学級担任，市教委の指導主事等，大学教員による個別の教育支援計画検討会を実施した。

8月，全教職員を対象として，「通常の学級において生かすことのできる合理的配慮の考え方について」をテーマに校内研修会を実施した。また，特別支援学級担任に事例研究に関する事前協議を実施した。

9月・12月，授業観察に加え，放課後に当該学校，市教委，県教委などの共同研究者と事例研究について60分間協議及び指導助言を実施した。

2 事例研究

1) 対象児童 特別支援学級6学級児童

2) 指導経過

①各学級毎に，対象児童を選定し，「朝の挨拶行動」に対する状況の確認（ベースライン期）を行った。

②ベースライン期の対象児童の「朝の挨拶行動」の状況を特別支援学級担任同士が確認し，自発的・より適切な「朝の挨拶行動」につながるような指導の手立てや支援ツールの検討を行った。

③ 11～12月に、実際に「朝の挨拶行動」の事例研究を実施した。

アウトカム（短期的成果）

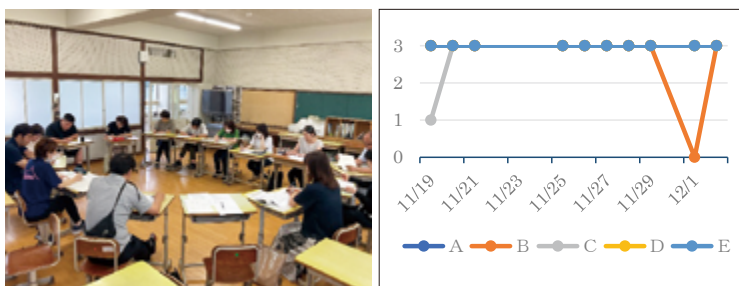
1 特別支援学級担任者間の連携における結果

- ・市教委により導入された個別の教育支援計画・個別の指導計画作成ツールを活用して、各特別支援学級の児童の実態把握、課題の特定、指導目標や指導内容の選定を相談しながら行うことができた。このことにより、担任以外の教員と実態や課題の共有が行えたり、相互にアイデアを出し合ったりすることで相互理解・連携を高めることができた。
- ・定期的に特別支援学級担任が集い、学級の状況や行事・授業計画の確認等を行った。このことにより、相互の事情や授業連携に関する相談を行うことに繋がった。



2 特別支援学級担任における特別支援教育の専門性の向上

- ・特別支援学級6学級が連携して、在籍児童による「朝の挨拶行動」について事例研究を行った。その際、各担任間で「朝の挨拶行動」の状況を把握した上で、担任による検討会を通じて、実態を共有したり適切な指導の手立てや支援ツールについて意見交換や情報共有をしたりして事例研究に取り組んだ。
- ・児童の実態によって、事例研究前から「朝の挨拶行動」ができていた児童もいれば、言葉による挨拶はできないが、会釈をするなどの態度で反応したりする児童もいた。事例研究開始後は、担任との約束や支援ツールの活用などを通じて、自発的に挨拶行動を行ったり、事前の行動よりもレベルアップさせたりする児童も現れた。
- ・また、学級全体で取り組むことにより、他の児童の挨拶行動に影響を受けて挨拶行動を行う児童も見られたり、担任以外の教員に対しても挨拶行動を行ったり、朝以外の場面での自発的な挨拶行動を行ったりする児童も見られた。



インパクト（波及効果）

1 学校全体における特別な支援を必要とする児童の理解推進と支援の質の向上

- ・校内研修会の実施後、協議の場や個別の教育相談を通じて児童の気になる様子を分析し、支援の手立てを考える様子が見受けられた。
- ・それぞれの特別支援学級で活用している支援の手立てを共有し、相互に活用し合うことができるようになった。
- ・特別支援教育コーディネーターを担当する特別支援学級担任が中心となって、他の特別支援学級との連携や相談の窓口として活躍する経験を得ることができた。

2 県教育委員会との連携による指導主事の専門性の育成

- ・学校コンサルテーションへの参加経験を通して、大学教員と共に授業観察や事例研究に参加することで、一連の支援の流れや基本的な技術、知識を得る機会に繋がった。

3 本事例研究を県内外に発信する効果の期待

- ・本事例研究は、県教育委員会主催「実践研究報告会」内でポスター発表を行う。これにより、県内外から参加する特別支援教育に携わる教員や関係者へ指導事例として情報提供されると共に、学校コンサルテーションの活用を促進させる効果が期待できる。
- ・令和8年度県教育委員会主催の研修会において実践紹介を行うことで、特別支援教育に携わる教員に対して実践報告による広報となる効果も期待できる。

メタバーズやVRを活用した 特別支援ICT教材の開発と実践

徳島県立鴨島支援学校

14

幼児教育コース 湯地 宏樹

徳島県立鴨島支援学校 田中留合子

徳島県立鴨島支援学校 近藤 早紀

徳島県立鴨島支援学校 新居 泰司

徳島県立鴨島支援学校 喜多久美子

徳島県立鴨島支援学校 清木場彩香

徳島県立鴨島支援学校 柳谷みゆき

徳島県教育委員会 教育DX推進課 外儀 真一

研究事業の概要

病弱・肢体不自由等により学習環境への物理的アクセスが制約される児童生徒にとって、校内外の移動を伴う体験活動は、学習内容の理解を深める上で重要である一方、実施機会が限られやすい。特に、校内見学や校外学習は、空間理解・社会理解・対人理解の基盤を形成する活動であり、代替手段の整備は学習保障の観点から喫緊の課題である。そこで本研究では、360°画像を用いたバーチャルツアー教材を整備し、遠隔・非同期でも体験的学習の機会を補完できる仕組みを構築することを目的とした。

他方で、VR教材が普及しても、操作系がマウス操作やVRコントローラ操作に依存する限り、重度の運動機能障がいや有する学習者は「閲覧はできても探索はできない」状態に置かれやすい。学習者が自律的に探索し、見たい場面を自ら選択することは、参加感や自己決定の形成に直結する。したがって、本研究の第二の柱として、重度障がい児のコミュニケーション支援で広く用いられる視線検出式入力装置（アイトラッカー）を援用し、視線によるツアー操作の可能性を検討した。

本年度は、校内（1階・2階）の空間理解を支えるツアーに加え、校外・海外を題材とする仮想見学ツアーを整備し、社会・地理・国際理解等の学習文脈で活用可能な教材群として位置付けた。

具体的な取り組み

教材設計においては、単一の360°画像提示に留めず、複数地点の画像を連結し、学習者が「移動しているかのように」空間を体験できる構造を採用した。具体的には、THETA 360.bizのツアー機能が提供する複数の360°画像をWeb上に表示し、マップと連携させることで室内移動の疑似体験を可能にする仕組みを活用し、校内各所の撮影ポイントと平面図上の位置情報を対応付けた。

この構成により、学習者はマップ上の撮影ポイントを選択して閲覧地点を切り替えたり、リンクを用いて隣接シーンへ遷移したりできる。また、ツアー側の操作要素（マップ、矢印、サムネイル等）は、一般にはクリック操作を前提とするが、視線入力環境では「注視→選択（クリック相当）」として代替できる。ツアーの操作要素がどのように提示されるかを踏まえ、視線で選択しやすい導線となるよう調整した。

制作面では、興味や関心をもつようにマスコットを置いて360°カメラで撮影し、ツアー作成画面での360°画像の取り込み、マップのインポート、必要に応じたアノテーション等の機能を用い、校内1階・2階をそれぞれ独立した

ツアーとして整備した。さらに校外学習の代替・拡張として、仮想見学ツアーを作成し、学習内容に応じて「見るべき地点を選び、移動し、比較する」という探索学習が成立する教材形態を目指した。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

本年度の主要なアウトプットは、第一に校内1階ツアー、第二に校内2階ツアー、第三に仮想見学ツアーの計3種の教材整備である。いずれも、複数の360°画像を単に提示するのではなく、マップとの連携により空間内を回遊する構造をもたせた点に特徴がある。これにより、学習者は「場面の閲覧」だけでなく「場面の選択と移動」を行える。

第二のアウトプットとして、視線入力（アイトラッカー）を用いた操作環境を整備した。具体的には、ツアー上のマーカー選択、矢印による遷移、サムネイル切替等のクリック操作を、視線によるポインティングと注視選択により代替できるよう設定し、手指操作に困難を伴う学習者でも自律的にツアー探索が可能となる基盤を構築した。視線入力を「VRの特殊機能」としてではなく、「意思決定と選択を成立させる操作体系」として位置付けた点が、本年度の設計上の要点である。

アウトカム（短期的成果）

短期的成果（アウトカム）として、アイトラッカーを搭載したヘッドマウントディスプレイ（Meta Quest Pro等）および外部視線検出式入力装置を用いた環境で動作確認を行い、視線によってツアー内の移動・閲覧が成立することを確認した。これにより、コントローラ操作を前提としないアクセス経路を確立し、機器構成、キャリブレーション、支援者による導入手順など、運用に必要な実務知見を蓄積した。

一方で、児童生徒を対象とした授業実践としての運用は未実施である。したがって現段階の成果は「教材と操作環境の整備および成立性確認」に位置付けられ、教育的効果の検証は次年度以降の課題として整理される。

インパクト（波及効果）

本取り組みのインパクトは、移動や手指操作に困難を伴う児童生徒に対し、校内外の見学・学習体験を身体負担の小さい形で提供し得る教材基盤を整備した点にある。特に視線操作の導入は、学習者が「自分で選ぶ」行為を担保し、主体的探索を可能とし、参加感、自己決定、気づきの共有といった学習過程の質的改善に波及する可能性をもつ。

さらに、ツアーはWeb上で共有可能であり、在宅・入院中の学習者に対する遠隔提供や、保護者・医療スタッフ・支援員を含む多職種連携の共通参照資料としても活用できる。ツアーの仕組み自体が「同一の視覚情報を共有しながら支援を協議する」土台となるため、個別最適な支援計画の具体化にも資する。今後、実運用と効果検証を通して、アクセシブルなVR教材の設計指針を整理することで、インクルーシブな学習環境整備のモデルとして他校・関係機関へ展開できる見通しがある。



人と関わる力を育む、地域や小学校と連携した幼児教育カリキュラムの開発

上板町教育委員会、東光幼稚園、東光小学校

15

幼児教育コース 佐々木 晃
東光幼稚園・東光小学校 山口 義明

上板町教育委員会
東光幼稚園 石川 早苗

研究事業の概要

上板町立幼稚園に在園する幼児の人と関わる力を伸長させるとともに、教職員の幼児理解と指導力の向上を図る。コロナ禍において一端途絶えた幼小の合同活動や地域の人的・物的資源の活用や連携についてカリキュラムに位置付けるとともに、「開かれた教育課程」として幼児教育の意義や価値を地域に根付かせていく方略を練る。

具体的な取り組み

1. 幼児期の資質・能力の発達と人と関わる力を促す環境構成と援助についての講義を聞き、自園での教育課程と指導計画を作成する。
2. 職員研修会を年2回実施し、幼児期にふさわしい体験や遊び、小学校との連携についてスキルアップを図る。
3. 人と関わる力を育成する教育実践の成果について町内の公共施設等で発信すると共に、その効果について保護者や小学校教員、幼児教育関係者から評価を得る。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1. 保育時間における人と関わる力を育成する遊びや活動の時間（週10時間）
2. 参観日などを活用した保護者への啓発と家庭での親子の活動時間（週1時間）
3. 職員向け研修（6時間）

アウトカム（短期的成果）

1. 人と関わる力を育成する教育実践の成果について町内の公共施設等で発信すると共に、その効果について保護者や小学校教員、幼児教育関係者からの評価。
2. 幼稚園の取組に対する保護者の評価（アンケート）

インパクト（波及効果）

1. 幼稚園教員の幼児理解とカリキュラムデザイン力の向上。
2. 幼児の人と関わる力を育む指導と評価能力の向上。
3. 町内の人的・物的資源を活用したモデルカリキュラムづくりと町内幼児教育施設への発展。
4. 地域の幼児教育に対する関心と期待感の喚起。

カリキュラムの評価、改善と保護者や地域への発信 発信内容はやはり、活動を通して促される幼児の資質・能力の育ち！

表1 令和7年度 小学校や地域との連携活動の実践内容

月	活動
4	幼稚園って楽しいよ！
6	トウモロコシの収穫体験をしよう！（新規）*
6	藍のたたき染めをしよう！
7	藍染めをしよう！
7	プールで遊ぼう！（新規）
9	技の館に藍染め体験に行こう！
11	東光フェスティバル
11	昔の遊び体験（新規）
11	東光祭りにいっしょい！（新規）
1	たこ揚げ

*は事例を掲載

トウモロコシの収穫体験をしよう！（新規）*

トウモロコシの収穫体験のドキュメンテーション

○年長児がミニトマト、キュウリ、ナス、オクラ、ピーマン、シシトウ、ゴーヤなどの夏野菜を育てている。また、小学校の花壇をお借りして、1年生、2年生と一緒にサツマイモ栽培を行っている。
○幼稚園の近くの畑で、雨の中、ダイコンの収穫をしている様子や、田植えの様子などを見ることができ、遊んでいる時に見つけ、興味をもつ幼児がいる。
○家族が農業をして生活している園児が数名おり、「ダイコンが終わって、枝豆を作っているよ」「ブロッコリーの次は藍を育てているよ」と、園児から話をきくことも多い。



○農家の方（保護者）に、幼稚園の近くの畑に次は何を植えるのかを聞いた（5月上旬）。ダイコンからエダマメだと教えてくれる。植えている様子を見学していか聞いてみると、後日、「幼稚園の近くの畑で、6月にトウモロコシの収穫をするので、体験してみませんか。」と誘ってくださった。

6月17日（火） トウモロコシの収穫体験をしよう！	
ねらい	・身近な地域の農業や食についての関心をもつ。 ・収穫体験を通して、自然と触れ合う。 ・地域で働く人たちの交流を通じて、地域でのくらしに興味をもつ。
対象児	年長児（10名）、年少児（6名） 2年生（5名）
活動内容	・農家の方に、農作業の様子を間近で見学させてもらったり、話を聞かせてもらったりする。 ・実際に収穫体験を行い、幼児が収穫したとうもろこしを触ったり、香りを楽しんだりする。 (収穫後の活動) ・収穫したトウモロコシを家庭に持ち帰り、家族と一緒に食べたり、トウモロコシを使った料理を作ったりする。 ・収穫体験の様子を絵や作品に表現する。



幼児の資質・能力の育ちについて

1. 健康な心と体

○藍液に茶こしをつける、空気に触れさせるなどの全身を使って活動することで、体を動かす楽しさを知り、心身ともに開放感を味わう。

2. 自立心

○自分たちでハンカチをくるくると丸め、どんな模様になるか考え、実際にやってみることで、「自分でできた！」という達成感を味わい、自信につながる。

3. 協同性

○一緒に60秒を数えたり、手がつかれながらも友達と一緒に頑張ったりすることで、友達と協力して活動する大切さを学ぶことができる。

4. 道徳性・規範意識の芽生え

○染料を大切に使う、順番を守る、活動の中でルールを守ること、みんなで使うものを大切にすることを育む。

5. 社会生活との関わり

○上板町の伝統文化である藍染めに触れることで、地域への興味関心を深める。

6. 思考力の芽生え

○2年生がしていた、洗濯ばさみやピー玉、フィルムケースでどんな面白い模様になるかを考えたり、色の変化を見て、不思議に思ったりする中で、様々な事象への興味関心と探求心が芽生える。

7. 自然との関わり・生命尊重

○藍の生葉に触れ、藍液の香りを感じ、自然の不思議さや面白さを感じ、命あるものを大切にすることを育む。

8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

○標識への関心・感覚・・・60秒を数えたり、どんな模様ができるのかなど、数量や図形への関心をもったりするきっかけになる。

9. 言葉による伝え合い

○藍染体験を通して感じたことを「きれい！」「じょうずにできた」など言葉で表現し、伝え合う喜びを味わうことができる。

10. 豊かな感性と表現

○藍の多様な青色や、模様の美しさに触れることで、完成を豊かにし、自分なりのイメージを形にする喜びを味わうことができる。

セクシュアリティを理由とした いじめを防止するための授業及び カリキュラムの開発に関する共同研究

板野町立板野東小学校

16

社会科教育コース 眞野 豊

板野町立板野東小学校 種浦 武
板野町立板野東小学校 根東 孝都

研究事業の概要

多様な性に関する認知や多様性尊重といった価値観が一般化しつつあるが、学校現場では依然としてセクシュアリティを理由としたいじめが起こっている。そうした現状を踏まえて学校現場では、セクシュアリティを理由とした差別を防止するための具体的な取り組みが求められている。そこで本研究では、そうした学校現場の要請に応えるために、板野東小学校の児童を対象に、当該校の教員と共同で、多様な性を理解し、セクシュアリティによる差別を防止するための授業及びカリキュラムの開発を目指して研究を行った。

具体的な取り組み

板野東小学校5学年の児童を対象に、担任の教員らと共に、性の多様性に対する理解を促すための授業開発を行った。具体的には、2025年10月24日に担任による事前学習を行い、10月28日に、私が担任の教員らと共に共同で、性のグラデーションモデルを用いて性に対する固定的なイメージを問い直し、性の多様性についての理解を深めるための学習を行った。その後、10月30日に担任による事後指導を実施し、12月6日の人権学習発表会（参観日）では、性の多様性についての学習の成果を子どもたちが発表した。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

本研究では、担任と共同で性の多様性を理解するための授業を開発し、実施することができた。具体的には、担任による事前学習では、子どもたちが持っている「男らしさ」や「女らしさ」についてのイメージを具体的な事物（仕事、ファッション、スポーツ、趣味など）を例に確認した。その後、担任の教員らと共に行った授業では、事前学習において子どもたちから出てきた「男らしさ」「女らしさ」のイメージを問い直し、性の多様性についての理解を深めるための学習を行った。具体的には、ゲストティーチャーである私が自分自身の性のあり方について説明した後、担任の教員や養護教諭が同じように、それぞれの性のあり方を、それぞれの経験や考えを踏まえて説明した。その結果、すべての教員が異なる性のあり方であることが示され、セクシュアリティが一人ひとり指紋のようにちがっていることを確認した。子どもたちはこうした身近な大人（教師）による多様な性の説明を通して、性の多様性についての理解を深めることができた。その後、10月30日に絵本を使ってLGBTについて理解を深める授業を実施した。

以上のように5学年の児童を対象に授業を開発し実施したが、他の学年での指導や長期なカリキュラムの開発には

さらなる積み重ねが必要であり、今後継続して指導及び研究する必要があることを確認した。

アウトカム（短期的成果）

授業後に児童が書いた振り返りシートからは、「自分は、もともと同性が好きな人のことをへんに思っていました。けどこのような学習のなかでそれが変わりました」などのように多様な性に対する否定的な考えが変わったという記述が複数あった。また、「先生やまのさんのグラフを見て、性のあり方が一人ひとりぜんぜんちがうことを知れました」「同性が好きなだけでいじめるなんておかしいと思いました」などのように、性が多様であることを理解するとともに、性によるいじめはよくないと考える児童の記述もあった。さらに「社会になぜ性を理由とした差別があるのかさらに調べたい」など、さらに学びを深めたいと書いた児童も複数いた。

また、授業後に担任や養護教諭への聞き取りを行い、教員の意識の変化についても調べた。その結果、授業づくりを通して、自分の中にあった性に対する固定的なイメージを顧みたり、自分自身の性のあり方についての理解が深まったりしていることがわかった。このように、授業づくりは、性の多様性に関する教員の意識の変化にもつながった。

インパクト（波及効果）

板野東小学校で始まった授業研究は、板野地域の他の小学校での学習や教職員研修の実施にもつながっている。2025年度は、板野西小学校で複数の学年の児童を対象に性の多様性を理解するための授業を実施した。学校間の横のつながりを通して、性の多様性に関する学びが広がるきっかけとなった。

また、板野東小学校での学習成果は、保護者や地域の人々が参観する人権学習発表会で発表され、地域の人々の人権感覚の向上にもつながっていると考えられる。

運動部活動を支援するスピード測定と スピード能力向上プログラムの開発

徳島市八万中学校

17

保健体育科教育コース 南 隆尚

徳島市八万中学校 前田 健吾

鳴門教育大学 客員教授 綿引 勝美

研究事業の概要

本研究プロジェクトは、中学校の運動部活動において、競技力向上と生徒の運動意欲の向上を目的に、「スピード」に着目した測定・評価・トレーニングプログラムを開発する。測定とトレーニングを通じて個々の成長を可視化し、指導者と生徒の双方にとって有益な支援のあり方、および、生徒自らによるフィジカルマネジメント力の育成のあり方、を考察する。

具体的な取り組み

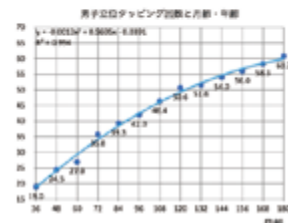
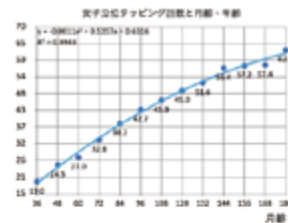
- 生徒のスピード能力（タッピングスピード、ドロップジャンプ）を定量的に測定・評価する。
- 測定結果に基づいた個別最適なトレーニングプログラムを設計・実施する。
- 運動部活動における科学的トレーニングの導入モデルを構築する。
- 生徒のモチベーション向上と、運動習慣の定着を図る。

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

〈個人測定結果レポート〉

測定記録（最大ピッチ数、平均ピッチ数、左接地時間、右接地時間、効率性・五段階評価、回数・五段階評価、タッピング年齢）を下表にしめすように作成した。それにもとづいて、各指導教員をとおして、生徒本人にフィードバックをおこなった。タッピングという簡単な動作によるスピード成長の年齢的な指標を得ることができるので、自己の成長段階を意識することができる。

	2025/10/21 16:59	最大 ピッチ	平均 ピッチ	左接地	右接地	効率性	五段階	回数	五段階	タッピング 年齢
バス女1	a	10.83	9.75	70	72	15.2	3	47	1	9.1
バス女1	a	10.62	9.43	69	68	15.5	3	44	1	8.5
バス女1	b	9.60	8.53	83	81	11.7	1	40	1	7.2
バス女1	b	9.70	8.82	81	81	12.0	2	40	1	7.2
バス女1	c	11.46	9.40	89	86	13.1	2	47	1	9.1



アウトカム（短期的成果）

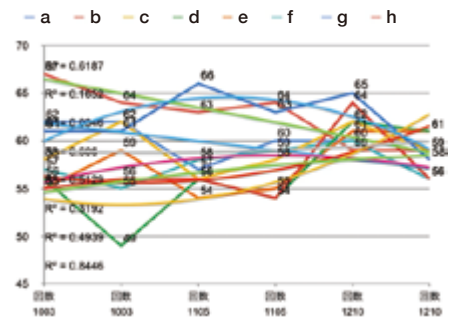
1. スピード能力の「見える化」

生徒一人ひとりのスピード能力をタッピング回数，タッピング年齢という数値として把握でき，生徒一人一人のスピード発達に自己理解と目標設定が可能になった。

2. 個別最適なトレーニングの導入

生徒の得意・不得意に応じた指導のデータによる裏付けを提供することができた。

3. 指導者間での情報共有がすすみ，種目間での指導観についての交流が活発となった。



インパクト（波及効果）

1. 科学的測定とデータに基づく指導について，サッカー，ハンドボール，野球，バスケットボール，バドミントンの担当教員間での情報交換が活発化し，運動指導への複眼的な視座が得られた。
2. 生徒の自己肯定感・学習意欲の向上，運動が苦手な生徒でも「成長が見える」体験を提供できた。

高等学校・中学校と連携した国際教育協力 およびグローバル人材育成の推進

徳島県立池田高等学校, 徳島県立富岡西高等学校, 鳴門市第一中学校

18

理科教育コース 寺島 幸生

徳島県立富岡西高等学校 中村 英幸

徳島県立池田高等学校 新久保 諭

鳴門市第一中学校 春木 慎吾

研究事業の概要

経済的負担や海外渡航への不安等により、海外研修を短期でも敬遠する高校・中学校は依然多い。このような負担や不安をなくし、県内中高生への国際教育の推進を図る目的から、海外の教育機関との人脈や多様な留学生を有する本学の強みを生かした国際交流活動を、県内の高校・中学校と連携して実践し、中等教育段階からの国際教育協力やグローバル人材育成に取り組んだ。

具体的な取り組み

- ・連携校や海外交流校等への訪問
- ・連携校と海外交流校との間のオンライン交流やペンパル交流の実施
- ・高校生向けの理数探究学習やそれらに用いる教材・教具の開発
- ・県内中高生・海外高校生・本学留学生の間での異校種間国際交流活動の実施

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

- 連携校および海外交流校の生徒に対し、以下の学習機会を提供した。
- ・海外の生徒と学校生活や自国の文化等について紹介し合うオンライン交流（図1）
 - ・海外の生徒と手紙・写真・贈り物等を送り合うペンパル交流（図2）
 - ・本学留学生による高校生を対象とした英語での理数授業（図3）
 - ・本学留学生と日本・台湾の高校生によるサイエンスワークショップ（図4）

アウトカム（短期的成果）

- ・連携校生徒・本学学生双方における異文化理解や語学力・コミュニケーション能力の向上
- ・本学学生・教員と連携校の中高生・教員との直接的な交流機会の創出
- ・海外で実践されている効果的な教育活動に関する情報や知見の収集
- ・本学学生における授業実践力や生徒理解力の向上、グローバル感覚の涵養

インパクト（波及効果）

- ・本学を核とする国際教育に関する高大連携モデルの発信
- ・国際教育協力やグローバル人材育成における社会貢献
- ・本学と地域の高校・中学校および海外交流校との連携協力関係の強化
- ・高校生・高校教員に対する本学の強みや教職の魅力の発信

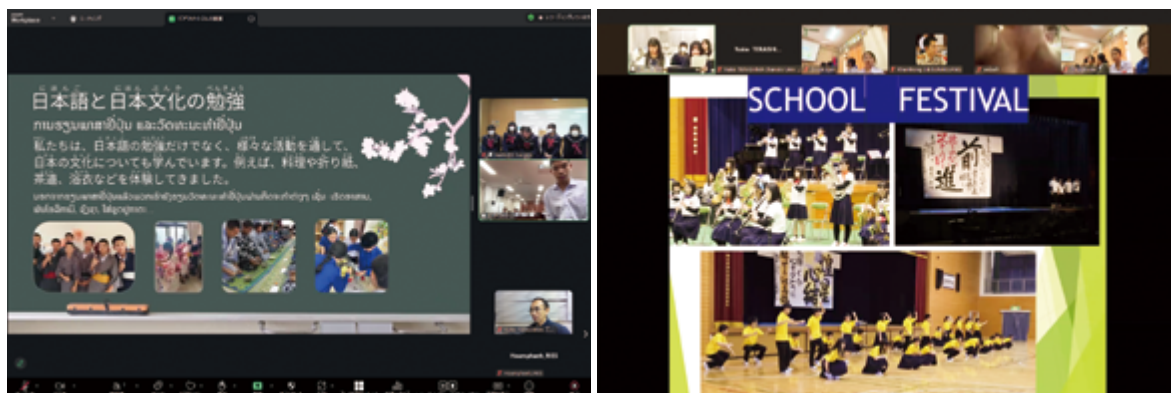


図1 連携校と海外（ラオス）の学校とのオンライン交流の様子



図2 連携校と海外（ラオス）の学校とのペンパル交流の記録



図3 本学留学生による高校生向けの理数授業の様子



図4 本学留学生と日本・台湾の高校生によるサイエンスワークショップの様子

教科書を題材にした「話すこと[やり取り]」の 言語活動の効果的な運営方法の探求 —異なる反復の方法とその効果—

徳島県立城ノ内中等教育学校

英語科教育コース 千菊 基司

徳島県立城ノ内中等教育学校 和泉 太輔

19

研究事業の概要

本研究は、高等学校の教科書の題材を用いた単元内の英語授業において、「話すこと[やり取り]」において、生徒が意見を述べ合うの活動に取り組みせる際の、効果的な指導法を提案することを目的とする。外国語科の目標の柱は発信能力を高めることであり、そのためにどのように言語活動に取り組みせることが良いのか、指導を通じて生徒（4年生）にもたらされたと考えられる発話や意識の変化を基に論じる。

具体的な取り組み

1. ミーティング・授業観察を通じた効果的な授業設計・運営方法の検討
2. スピーキングテスト（指導前後／全員）・インタビュー（事後／一部生徒・無作為抽出）
3. テスト・調査結果を踏まえ、指導の効果の考察

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1. 効果的な授業設計・運営方法

教科書の題材に関連した社会的な話題について、生徒は異なる立場に分かれ、論理性に注意して自分の考えを話して伝える、ディベート型の言語活動に3週間（6回）取り組んだ。あるクラスは同じ話題を繰り返して扱う（同一話題反復群・17名）、別のクラスは同じテーマであるが毎回異なる話題を扱う（類似課題反復群・15名）よう、クラス別に2つの指導手順を設定した。*人数は指導前後のテストを両方受験した生徒数で、授業を受けた生徒数ではない。

2. テスト・調査

授業で扱う話題テーマ Health に関する話題（“Smoking should be banned.”）で意見を述べるスピーキングテストを、指導の前後に実施した。全文を書き起こし、発話量（総語数）・語彙的多様性（異なり語数）・課題達成度（内容の適切さ：理由や具体例の数）の観点から分析した。インタビューは抽出した生徒に対し授業者が行い、発話内容を分析した。指導方法の違いが、パフォーマンスや学習姿勢にどのように影響するかを明らかにする機会となった。

3. 指導の効果

発話量について、両群とも指導後に増加があり、時間の主効果が認められ、反復指導の効果が示された。語彙的多様性については、時間の主効果に加え、処遇の主効果も有意で、同一話題反復群の受けた指導が、異なり語の算出という側面で発話の質に差を生む可能性が示された。さらに課題達成度では、処遇と時間の交互作用に中程度の効果量が確認されたため（ $p=.147$, $\eta p^2=.07$ ）、同一話題反復群では、説得力のある内容構成により強い意識を向けた状態で取り組みが進んでいたことが伺える。内容構成について個別の変化を確認すると、同一話題反復群の生徒の多くが総じて向上したのに対し、類似課題反復群は向上した生徒数と下回った生徒数が拮抗していた。また、インタビュー調査で得られた発言の質的分析から、同一群の生徒方が、指導手順が違うことによる効果を適切に意識できている内容が確認され、教科書題材と関連付けた話題を用いた学習活動への効果も十分感じていたと判断できた。

アウトカム（短期的成果）

本研究の結果は、スピーキング能力の発達が単一の次元では捉えられないことを示している。発話量の増加は、ディベート活動の反復で達成できるが、語彙の多様性や、説得力のある内容構成といった質的側面の向上は、指導手順の違いに依存し、同じ話題の反復が有効である可能性が高いことが示せた。言語活動は、多くの教室で一度しか利用されない。同じ課題の繰り返しが単調で、暗記につながると考えられるためか、学習効果が薄いと思われるがちである。ところが英語で話すことは複雑で総合的なものであり、生徒が言いたいことと実際に言えることのギャップは容易に埋まらない。話す相手を変えることで、多様な意見に触れる。そのため、生徒は同じ課題を繰り返すことに意義を感じ、熱心に取り組む。本研究の対象のように、意見を述べるタイプの言語活動であっても、同じ話題に反復して取り組ませることで、発話内容の改善という高次の課題を意識できる状態で、生徒が活動に取り組めると推定される。類似課題を数多く用意する手間を考えると、活動の単純な反復の導入が高校生の英語授業で普及すると、教師・生徒ともに得られるメリットは大きいと言える。

〈1〉指導手順（両グループ共通）

教科書の問題演習（英問英答等）を実施後、内容理解（文構造把握、表現確認等）を実施。その内容に付随するトピックに関して、ディベート活動を行った。

ディベート活動のトピック（3週間）

- 同一群が扱ったトピック（週ごとに異なる）
All pharmaceutical companies should be nationalized.
Japan should introduce a fat tax on junk food.
Eating breakfast should be legalized.
- 類似群が上記に加えて扱ったトピック（例）
To prescribe antibiotics when not absolutely necessary should be banned.

〈2〉指導前後に得られた生徒発話の比較

- 発話量（実発話語数）

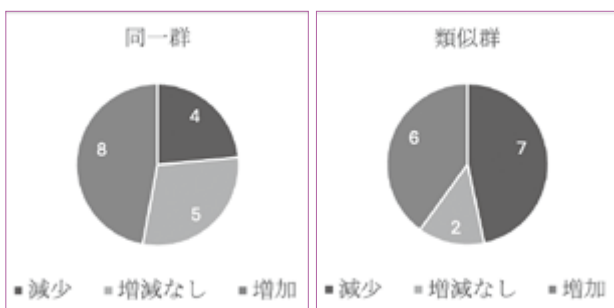
	指導前		指導後	
	M	SD	M	SD
同一群	62.71	14.55	71.88	16.22
類似群	58.07	11.49	65.27	10.95

- 語彙的多様性（異なり語数）

	指導前		指導後	
	M	SD	M	SD
同一群	37.29	7.68	43.41	6.22
類似群	36.53	7.55	40.53	5.36

- 課題達成度の変化〔平均点と得点分布図〕

指導前：同一群 5.24 類似群 5.00
指導後：同一群 5.70 類似群 4.87



授業中の活動の様子

インパクト（波及効果）

言語活動に反復して取り組ませた方が良いというのは、外国語指導法の研究ではすでに常識であるが、実証研究で用いられる題材の多くは絵描写かストーリーテリング課題である。日本の高校生を対象に、短期間で、意見を述べる課題で得られた結果であることに、研究の新しさがある。

全国的に見ると、「話すこと〔やり取り〕」の言語活動の実施はいまだに100%とはならないが、本研究の成果として、発話の質や内容を高めるために、複雑な手順、多くの手順で構成される言語活動を準備する必要があるわけではないことが示せた。話すための話題を教科書の題材と関連づけ、短い時間で区切った活動に何度も取り組ませて英語で話させ、フィードバックを与えて、誤りだけでなく、より効果的な発話内容のあり方を考えさせることで、即興的に英語で話す活動を通じて、英語運用力の向上を促せる。多くの英語教師に、英語でやり取りさせる言語活動を、積極的に取り入れる授業スタイルへの変化を促す根拠を示すこととなったと考えている。

絵本でつながる教育の場

徳島県立徳島視覚支援学校・徳島県立徳島聴覚支援学校

20

特別支援教育コース 高原 光恵

徳島県立徳島視覚支援学校・徳島県立徳島聴覚支援学校 廣島 慎一

鳴門教育大学 嘱託講師 森 慶子

幼児教育コース 垂髪あかり

研究事業の概要

鳴門教育大学の学生（大学生，大学院生）が「すてきなおはなしとどけ隊」のメンバーとなり，幼児・児童・生徒とともに絵本を楽しむ時間を作り出すという活動を企画した。学生にとっては，見えにくさや聞こえにくさのある子どもたちが絵本の世界を楽しめるにはどのようにしたらよいか，学校教員や絵本専門士の助言，学生同士の相談，さらには絵本の読みあい当日の子どもたちとのコミュニケーションから学びを深める機会となることを期待される。子どもたちにとっては，日常とは少し違う世界観や学生とのやりとりを楽しめる時間となることを期待する。

具体的な取り組み

絵本の読みあい活動に関心を持ち「すてきなおはなしとどけ隊」のメンバーとなった学生が主体となり，絵本の選定，読み方の練習，訪問時の役割分担など，子どもたちの興味・関心や伝え方を考慮しながら毎回の訪問準備を重ねた。なお，連携機関の徳島視覚支援学校・徳島聴覚支援学校の先生方には，絵本読みあい時の配慮点や練習で生じた疑問への相談など随時協力いただける体制であった。

訪問の準備として，主な内容は以下の通りである。

- ・絵本の選定，訪問担当者間での役割分担，絵本の読みあい時の工夫についての相談
- ・触察できる形態に工夫した絵本作り，物語に合う触るアイテム探しや製作
- ・手話表現の作成，手話・口話併用の練習，オンラインでの手話指導



ばけたくん



本番直前



おおきいサンタとちいさいサンタ

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

9月から2月にかけて、絵本の読みあい活動として計21回、実施する機会が得られた。訪問日程により参加可能なメンバーが決まり次第、訪問担当者間で打合せを行い、上記の取り組み（絵本選定、練習、事前オンライン指導など）が行われた。

徳島視覚支援学校では、小学部・中学部・高等部にて、のべ9クラスで実施することができ、徳島聴覚支援学校では、幼稚部にて6回、小学部にて6回、実施することができた。

それぞれの訪問において、前者では読みあい活動後の振り返りの時間を設けていただき、以後の担当者にも学びの共有がなされた。後者では訪問担当者間で練習している手話表現が子どもたちに伝わる表現となっているかどうか、子どもたちをよく知る学校教員からオンラインでの手話指導を受ける時間を毎回いただき、修正事項について以後の担当者とも情報共有がなされた。

アウトカム（短期的成果）

・大学生・大学院生にとって

絵本の読みあい活動に参加した学生の感想より、訪問先の子どもたちに合わせた創意工夫の体験や事前事後の学校教員との話し合いや助言から多くの学びが得られたことが明らかとなった。また、訪問当日の子どもたちとのコミュニケーションから、もっと伝えたい、楽しんでもらいたいといった今後に向けた意欲が増す様子が見られた。参加前に抱いていた伝え方の自信不足や困難さのイメージをすっかり払拭してしまうポジティブなエネルギーを子どもたちから浴びて、大学へ戻って来ていた。実際に、複数回、参加を重ねる学生は、伝達力も向上し、工夫のアイデアも次々に実現し、子どもたちを楽しませていた。

・幼児・児童・生徒にとって

絵本活動の訪問を楽しみに待っている様子であった。絵本や物語そのものを楽しむ時間でもあり、緊張しながらも楽しませようと頑張る学生との出会いを楽しめる時間でもあったと考えられる。絵本の選定において、アドバイスも受けられながら、多くは各訪問担当の学生が選択したものが優先的に採用された。そのため、日頃、図書室にある本とは違うものが提供されたり、学生それぞれの読み方の個性が違ったり、日常との違いをもたらすこともできたのではないかと考えられる。

課題としては、学校と大学間の距離が離れているため、訪問担当者が限られることである。大学の授業期間には参加することが難しく学内サポーターとして活動協力するメンバーがいることは心強いが、訪問の希望が思うように叶わない実態がある。一方、遠距離であってもオンラインで手話指導いただいたり、質問へメール回答いただいたり、学校と大学との情報交流はスムーズに行えることが確かめられた。



怪盗にゃー

インパクト（波及効果）

- ・学生の教職に対する意欲・意識の向上、大学院生の実践力の向上などにつながる活動であったと思われる。こうした活動の成果は、卒業・修了後に教育現場で会う子どもたちへの教育的支援においても活かすことができるものと期待される。
- ・学校と教育大学との連携がさらに深められたと考えられる。特に、絵本活動の改善・向上につながる助言・指導、協議の時間を調整し、対面やオンラインで対応くださったそれぞれの学校の先生方の協力、その意義を理解し受け止める参加者すべてにおいて、今後の連携促進につながる経験となった。

家庭教育支援ワークショップの 普及促進を図る広報媒体の在り方に関する 共同研究

徳島県教育委員会生涯学習課

21

幼児教育コース 木村 直子

徳島県教育委員会 生涯学習課 学校・家庭・地域連携担当

宮本 篤志

研究事業の概要

本研究は、徳島県における家庭教育支援推進の一環として実施されている「とくしま親なびワークショップ」の更なる普及促進を目的としたものである。県内では毎年約1,000名の保護者等がワークショップに参加しているが、実施校等が固定化しつつあることから、より広範囲への普及が求められている。

そこで、本プロジェクトでは、家庭教育支援の普及啓発をより広範囲に促進することを目的とし、アナログとデジタルを組み合わせたハイブリッド型など、より訴求力の高い広報媒体の在り方について研究する。

具体的な取組み

本研究事業では、次の3点を中心に取り組みを進めた。

- ①プログラム集と連動した「実践動画」の制作
- ②訴求力の高いコンテンツの創出
- ③上記内容を掲載した新たな広報冊子の制作

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

①プログラム集と連動した「実践動画」の制作

徳島県教育委員会生涯学習課が実施する「とくしま親なびワークショップ」の魅力を伝えるため、プログラム集と連動した実践動画を制作した。今年度実施したワークショップにおいて、主催者及び参加者の許可を得た上で撮影を行い、以下の様子を収録した。

- ・ファシリテーターによる進行
- ・アイスブレイクを楽しむ参加者の姿
- ・ワークシート記入の様子
- ・グループでの対話・共有の場面

これらをコンパクトに編集し、ワークショップの魅力や学びのプロセスが、視覚的かつ直観的に伝わる動画としてまとめた。

②訴求力の高いコンテンツの創出

家庭教育のトレンドは子育てを行う保護者にとって関心の高いテーマである。また、ワークショップ実践者や参加者の感想など、いわゆる「生の声」はワークショップの更なる普及を目指す上で、最も効果的で、訴求力の高いコンテンツであると考え、現役のファシリテーター（親なび）を



ワークショップの様子



対象としたアンケート調査を実施した。

内容としては、ワークショップの担い手となる新たなファシリテーター（親なび）の養成につなげるため、「親なびを始めた理由」や「親なびの魅力」等の質問を設け、回答を依頼した。

なお、参加者の感想については、ワークショップの度に実施するアンケート調査の自由記述を活用することとした。

③家庭教育推進広報冊子の作成

家庭教育の重要性を伝えるとともに、「とくしま親なびワークショップ」の普及を目的として新たな広報冊子を制作した。冊子には以下の内容を掲載した。

- ・徳島県における家庭教育推進について
- ・アドバイザー紹介
- ・家庭教育に関するトピック
- ・「とくしま親なびプログラム」の特長
- ・ワークショップの流れ
（導入→アイスブレイク→主活動→振り返り→学びの広がり）
- ・実践動画にリンクする二次元コード
- ・「親なびげーたー養成講座」の紹介
- ・アンケートに基づく「参加者の声」「親なびさんの声」
- ・Q & Aほか



特に、実践動画の二次元コードを添付することで、紙媒体だけでは伝わりにくい臨場感や、学びのプロセスを補完し、ハイブリッド型の訴求力の高い広報媒体として仕上げた。

アウトカム（短期的成果）

①新たに家庭教育支援に取り組む学校園・機関の創出

本研究事業を通じた広報及び啓発の結果、新たに家庭教育支援ワークショップに取り組む学校園・機関が2箇所生まれた。これまで家庭教育支援の取組みが十分でなかった地域において、新たな実践が立ち上がったことは、本事業の成果として大きな意義を持つ。

②家庭教育支援の担い手の広がり

新たなファシリテーター（親なび）の養成につなげるため、毎年実施している「親なびスキルアップ研修」とあわせて、ファシリテーター体験講座を実施したところ、ファシリテーターに関心のある方など、23名の申込みがあった。現役のファシリテーター（親なび）との交流を深めることができ、従前の研修に深みが増した。今後の家庭教育支援の担い手の増加が期待される。



体験講座の様子

③県内全域の学校・園等への効果的な広報活動

既存のチラシ等に加え、新たな広報冊子及び県ホームページも活用し、重層的で効果的な広報活動が実現した。チラシで興味関心を喚起し、より詳しい情報を掲載した広報冊子やホームページに誘導するといった、プッシュ型とプル型の媒体を組み合わせた広報活動により、ワークショップに広がりが見られた。

インパクト（波及効果）

①新たな学校園・機関への広がり

スマートフォン等のデジタルデバイスを前提としたコンテンツを掲載した紙媒体（冊子）による広報を通じて、家庭教育支援の必要性がより明確に伝わった結果、新たに複数の学校園・機関において、家庭教育支援に取り組む動きが生まれた。

②ファシリテーター養成への関心の高まり

ワークショップ参加者等から「自分も進行役として関わりたい」という声が増え、次期ファシリテーター養成講座への参加希望者の拡大が期待される。地域の担い手育成につながる重要な波及効果が確認された。

③家庭教育の充実

家庭教育支援の広がりにより、各家庭や地域における家庭教育への意識が高まるとともに、相互のネットワークの充実が図られ、地域で子供たちを見守る環境が醸成されている。

自立学習の定着と自己効力感の向上を 目指した小学校算数科における探究学習の 開発と検証

高松市立牟礼小学校

22

学習指導力・ICT教育実践力開発コース

竹口 幸志

高松市立牟礼小学校（学習指導力・ICT教育実践力開発コース大学院生）

古庄 愛

研究事業の概要

本研究目的は、小学校算数科における児童の自己効力感の向上である。牟礼小学校は自立した学習態度の形成や自己効力感の向上に取り組んでいる。総合的な学習の時間をカリキュラムの核におき、成果をあげているが、算数科における自立した学習態度の形成や自己効力感の向上に課題が生じている。

本共同研究では、ICT技術を活用し「算数科における探究学習手法」を開発した。結果として、児童は探究的な学びのプロセスに沿って主体的に学習を進め、自分のペースで取り組む満足感を得ながら発展的課題にも積極的に挑戦するようになった。個人のめあてを立て、振り返りを通して自己有用感や次の学習への意欲を高めたほか、得意分野を生かした表現や生活への応用も見られた。これらの姿から、児童が自己効力感を高め、「探究的な学び」を日常の学びとして捉えるようになったことが示された。

具体的な取り組み

1. 算数科に対する児童の学びの意識調査
2. 「めあて」と「振り返り」に対する児童の認識調査
3. 「算数科における探究学習手法」の開発
4. 授業実践
小学3年生46名、算数科「時こくと時間」(4時間)、「1万をこえる数」(10時間)
5. 評価・検証

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

1. 「算数科における探究学習手法」の開発

児童に対する意識調査の結果、児童の関心は高く、学習の見通しや振り返りの重要性を認識していたが、45名中12名が「めあて」の設定に困難を感じていることが明らかになった。そこで、本研究では「めあて」と「振り返り」の意義を児童自身が理解し、探究的な学びの入り口として機能するような算数科の授業デザインを開発した。(図1)

2. 「探究的な学びのプロセス」の定着

質問紙において、45名回答中44名の児童が「探究的な学び方が身に付いた」と回答した。授業動画からは、児童

が「探究的な学びのプロセス」の各段階で、自己に合った学習形態を選択したり、他者と対話し自己の考えをまとめたりする姿が確認された。授業実践前後の児童のノート記述の比較では、児童が自己に目を向け「やればできる」という思いから、主体的に学習に取り組むようになったことが伺えた。

3. 「個人のめあて」と「振り返り」の定着

授業実践後の質問紙の記述から、めあてを書くことに対する児童の意識と取り組み方に変容が見られた。まず、内省や意欲が見られるようになり、めあてを立てるために、具体的な手がかりを獲得していることがわかった。さらに、児童が、学習動機、戦略、評価の面で自己調整力を向上させたことが示唆された。また、「まとめて、つないで、繰り返す」という学習サイクルを確立した児童も見られた。振り返りにおいて、2名の児童の記述から、学習内容や学習活動によって学習形態を変えたり、自己の学習について分析的な視点で捉えたりすることができるようになったことが確認された。

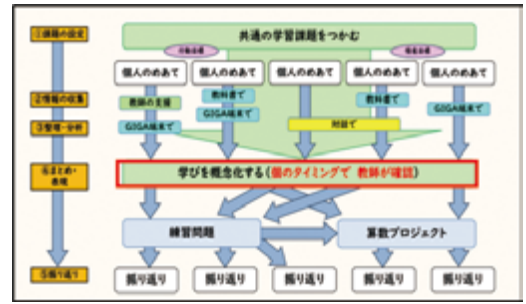


図1 小学校3年算数科における探究的な学びの方策

アウトカム（短期的成果）

検証の結果、成果は以下の通りである。

- ・児童は、「探究的な学びのプロセス」に沿って学習することができるようになった。
- ・児童は、自分のペースで学習を進めることに満足し、積極的に発展的な問題に取り組んだり、自分で教科書を見て考える習慣が身に付いたりした。
- ・児童は、「個人のめあて」を立てることができるようになった。
- ・児童は、学習内容を日常生活に応用しようとする実践的な思考が見られた。
- ・振り返りで、自己有用感を育んだり、次への高みを目指したりする記述が見られた。
- ・自身の得意分野を活用して、思考したことをまとめる児童の姿が見られた。
- ・児童が自己効力感をもつことで、意欲的に取り組む姿が見られた。

さらに、本実践を通して、児童が「探究的な学び」を、特別な学びではなく日常的な学びであると捉える姿が見られるようになった。

インパクト（波及効果）

本研究は、小学3年算数科において「探究的な学びのプロセス」を日常的な授業の中に位置付け、児童が自ら学習を設計し、振り返り、次の学びへつなぐという一連の主体的学習行動を身に付けるための実践モデルを提示した点で大きな社会的意義を有する。特に、中央教育審議会（2021）が提起する「個別最適な学びと協働的な学び」の一体的な充実が求められる現代の学校教育において、本研究で示された授業改善の枠組みは、政策が目指す学びの在り方を具体化する有効な指標となる。

第一に、本研究は、児童一人ひとりが「めあての設定」「学習形態の選択」「振り返り」という過程を通して自己調整学習力を高め、自らの学習を能動的に構築する姿へと成長する可能性を明らかにした。これは、学力格差や学習意欲の格差縮小に寄与し、持続的な学習者としての基盤形成に資する社会的効果が大きい。

第二に、本研究で用いられた学習プロセスの提示方法や児童支援の手立ては、教員研修や校内研究における研修教材としても活用可能であり、教員の授業デザイン力向上に波及する効果を持つ。

第三に、児童が学んだ内容を家庭や生活場面へ応用しようとする姿が見られたことは、学校での学びが地域社会や日常生活へ接続する可能性を示すものである。児童が自ら問いを立て、生活経験と学習を関係付ける姿勢は、地域課題探究や家庭学習の質の向上など、学校外への波及的な教育効果をもたらす。

以上の点から、本研究は「自律した学び手」の育成を目指す教育実践に対し、算数科を中心とした汎用性の高い授業モデルを提示した点で、学校現場・教育政策・地域社会の各側面において大きな貢献を示すものである。

メディア情報のファクトチェックと データ活用を通じた対話力・批判的思考力の 育成に関する実践的研究

和歌山県立和歌山北高等学校

23

学習指導力・ICT教育実践力開発コース

長井 映雄

学習指導力・ICT教育実践力開発コース

石川 勝彦

和歌山県立和歌山北高等学校

平山 勝浩

研究事業の概要

現代社会においては、SNS などを通じて日常的に膨大な情報が流通しており、その中には誤情報やフェイクニュースも少なからず含まれている。とりわけ若年層は、これらの情報に無批判に接することで、感情的かつ断定的な判断に陥りやすく、論理的思考力や対話的態度の育成が困難となる状況が指摘されている。そこで本研究では、高等学校「情報Ⅰ・Ⅱ」で扱われる内容を踏まえ、メディアリテラシーおよびデータリテラシーの両側面から情報を批判的に読み解く力と、根拠に基づいて他者と建設的に議論する力の育成を目指し、教材および授業の開発に取り組んだ。

具体的な取り組み

◆メディア・データリテラシー育成授業

- 1) 2025年7月～9月、情報担当教員と教材および授業開発に係る打合せ
(学習目的の共有、印象操作を軸とした授業構成の整理、討論活動および評価方法の検討)
- 2) 2025年10月、新聞記事を題材とした印象操作に関する討論活動の実施
(根拠に基づく意見表明を重視した討論活動)
- 3) 2025年10月、文章表現を用いた印象操作に関する授業の実施
(見出しや語句の違いによる印象変化の分析活動、同一事実に基づく表現の比較活動)
- 4) 2025年11月、グラフ表現を用いた印象操作に関する授業の実施
(軸や尺度の設定による印象変化の理解、適切な表現と誤解を与えやすい表現の比較)
- 5) 2025年12月、写真表現を用いた印象操作に関する授業の実施
(構図や視点、切り取り方による印象の違いの分析および意図的な表現活動)
- 6) 2025年12月、文章・写真・グラフを統合した情報表現活動の実施
(複数の表現手段を根拠として用いた意見の整理および表現活動)
- 7) 2026年1月、学習成果の発表および相互評価の実施
(生徒主体による発表および他者評価を通じた対話的活動)
- 8) 2026年1月、実践授業の検証
(生徒アンケートの分析、討論時の発言記録等の整理、情報担当教員へのヒアリング)

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

◆情報担当教員へのサービス

- ・メディア表現の読み取りに着目した授業の共同開発および実施に関する支援
- ・メディアリテラシー育成を目的とした教材および授業モデルの開発・提供
- ・メディア表現の読み取りと活用を軸とした教育的アプローチの整理および授業への導入支援

◆生徒へのサービス

- ・新聞、文章、グラフ、写真など多様なメディア表現を扱った実践的なメディアリテラシー授業の提供
- ・情報の収集・整理・表現に関する基礎的な学習機会の提供
- ・複数のメディア表現を題材とした探究的・プロジェクト型学習の実施および成果物の作成

アウトカム（短期的成果）

本研究では、メディアリテラシーおよびデータリテラシーの視点から、印象操作を題材とした実践的な授業プログラムを開発し、情報担当教員の指導力向上とともに、生徒の批判的思考力および対話力の育成を目指した。

はじめに、情報担当教員と連携し、教材および授業構成の検討を行った。印象操作を共通の軸として、新聞記事、文章表現、グラフ表現、写真表現を段階的に扱う授業構成を整理するとともに、討論活動や評価方法について検討し、教材の開発および授業設計を行った（図1）。

次に、新聞記事を題材とした討論活動を実施した。生徒は、見出しや本文表現の違いに着目し、情報の伝え方が受け手に与える印象について検討した。討論では、記事内容を根拠として意見を表明し、他者の意見を踏まえて自らの考えを再考する活動を通して、対話的に思考を深める姿が見られた（図2）。

続いて、文章表現、グラフ表現、写真表現を用いた印象操作に関する授業を実施した。文章表現では、同一の事実を異なる見出しや語句で表現する活動を通して、表現の違いによる印象変化を分析させた。グラフ表現では、軸や尺度の設定によって生じる印象の変化に着目し、適切な表現と誤解を与えやすい表現を比較する活動を行った。さらに、写真表現では、構図や視点、切り取り方による印象の違いを比較し、意図的な表現の在り方について考察させた（図3）。

これらの学習を踏まえ、生徒は文章・グラフ・写真を統合して情報を整理し、複数の根拠に基づいて自らの主張を構成するチラシを作成した。最終的には、学習成果を発表し、相互評価を行うことで、他者の視点を通して自らの表現や論理構成を振り返る機会とした。

これらの実践を通して、生徒は情報の表現方法に内在する意図を意識しながら情報を読み解き、根拠を基に意見を述べ、他者と対話しながら考えを深める力を高めた。また、情報担当教員にとっても、教材開発や授業設計、評価方法の検討を通じて、メディアリテラシーおよびデータリテラシー指導に関する専門性の向上につながったことが、短期的成果として確認された。



図1 印象操作に関する学習教材



図2 グループによる学習活動



図3 印象操作に係る体験的な学習活動

インパクト（波及効果）

情報担当教員の専門性の向上

生徒のメディアリテラシーの向上

研究成果を県情報教育研究会等で共有し、他校での発展的な展開への寄与

盲学校における境界性人格障害の 中核症状と対応に関する共同研究

和歌山盲学校、山梨学院大学

24

学習指導力・ICT教育実践力開発コース 石川 勝彦
和歌山盲学校 長井 恵季

和歌山盲学校 柿本 友惟
学習指導力・ICT教育実践力開発コース 長井 映雄
山梨学院大学 学生相談室 神田美津子

研究事業の概要

盲学校には盲に限らず、多様な発達障害を有する子どもたちが通い、特別支援教育の専門性がますます求められつつある。現在、ADHDの診断を受けた子どもたちの中に、従来の典型的なADHD症状に還元できない、境界性人格障害と理解すべき事例が多く含まれ、理解の増進、対応技法の学習が求められている。本研究では境界性人格障害というイメージのしにくい類型の症状と対応技法について、現場、心理職との共同研究を行うことを目的とする。

具体的な取り組み

- (1) 境界性人格障害の理解と支援に関する講演会の準備会議（7月8日・7月15日・7月22日・9月18日）
- (2) 境界性人格障害の理解と支援に関する講演会実施（10月28日・12月12日・2月3日）
- (3) [質的調査] カウンセラーと特別支援学校における、境界性人格障害の理解・支援方法の違いの解明に向けた聞き取り調査
- (4) [量的調査] 各種校種における発達に特性を有する子どもたちへの支援能力の実態と要因の解明に向けた全国調査

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

- 境界性人格障害の理解と支援に関する講演会実施（10月28日・12月12日・2月3日）
境界性人格障害の診断基準、主訴、対応方針、「聴く」テクニック、改善策を中心に講演会を実施した。加えて、特別支援学校教員およびカウンセラーによる対応方法の具体的な調査結果を紹介した。さらに、気になる子どもが在籍するクラスにおける学級経営の成否および担任のバーンアウトに影響を与える変数を探索した量的調査結果を合わせて紹介した。
- 境界性人格障害への支援アプローチについて、心理臨床と特別支援を対比的に理解する質的研究を行い、理解と支援の具体について知見を得た。得られた知見は講演会を通じて報告した。
- 量的研究（全国調査）を行い、発達に特性を有する子どもたちへの学校の支援力（学級経営）および教師のバーンアウトに関する知見を探索した。得られた知見は講演会を通じて報告した。

アウトカム（短期的成果）

●境界性人格障害の理解と支援に関する質的研究の結果概要

◎現実の子どもたちの教師・カウンセラーにおける現れ

特別支援学校の教員3名、カウンセラー1名に聞き取り調査を行い、現場の教員・カウンセラーが具体的に対象児童生徒をどのように把握しているかについて表1に整理した。ICD-11では、境界性人格障害の主訴を「自己機能の障害」「対人関係機能の障害」「感情の障害」「行動の障害」「自己と他者を害する行為」「全般的な心理社会的障害」に整理している。臨床ガイドブックでは「見捨てられ不安」「気分や対人関係の両極端な変動」「自傷行為や自殺企図」「空虚感・自分への違和感」「解離性症状」「親に対するこだわり」等の症状が紹介されたりする（岡田、2012）。毎日・毎週、当該児に接する特別支援教員、カウンセラーは「対人関係の困難」「注目を集めたい欲求」に由来し「虚言」「振り回す」などの行動、あるいは「他者を傷つける

ことへの無自覚」等をあげている。

表1 児童生徒の様子

ケース A	他傷, 自傷, ものが壊れる
ケース B	学校では静かだが, 家庭であれている, 保護者が負担感を感じ学校に助けを求める
ケース C	人間関係を作るのが苦手, 先生とのみ対人関係をつくれる, 「いじめられている」などの訴えがある
ケース D	「話を聴いてほしい」との訴えがある, 自傷, 自殺のほめかし, 衝動的行動あり, 保護者に対する高い期待
ケース E	注目を集めたい欲求, 虚言の傾向あり, 学習に困難あり

◎職種別対処法

うち, 特別支援教員 2 名, カウンセラー 1 名の対処方針を表 2 にまとめた。濃淡はありながらも「心理的安全基地になる」「同じスタンスで向かい続け安心感を与える」「傷つける言葉や挑発を真に受けない」「冷静に振り返りお手本を示す」「巻き込まれない, コントロールされない」「価値観を押し付けない」「枠組み・支援の限界を明確にする」が概ね共通していた。いずれの人物も対象児童生徒の攻撃性とこれへの自覚のなさ, 周囲を振り回してしまう傾向を熟知したうえで, コントロールされない技術, 自傷等の不適応行動を強化しない(反応しない), ルールと支援の限界を定める, 自己コントロールに向けた作戦会議を継続することを自然に実行していることがみてとれた。

表2 対処法の具体

対処方法	対処方法の具体		
	特別支援教員 A	特別支援教員 B	臨床心理士
1. 心理的安全基地になる	とことん受容するポジションの教員を用意する	自然な会話の流れの中で受容と自立支援を並走させる	傾聴を進める
2. 同じスタンスで向かい続け安心感を与える	ぶれない態度を一貫して示し, 揺さぶりが無効であることを示す	当該児童生徒に一貫した対応が可能な先生をチームであてていく	セッションの回数, インターバルを決め, 枠の維持に努める
3. 傷つける言葉や挑発を真に受けない	同じ土俵にはのらない(反応の応酬を避ける, 応酬が報酬になることを避ける)	真に受けた「振り」も織り交ぜながら, 挑発の無意味さについて声かける	共感的理解が過剰になると枠が崩される可能性があるため枠の維持に努める
4. 冷静に振り返り, 客観的な視点から「お手本」を示す	「その言い方だと相手が傷つくよ」と諭すこともある	過去の不適応を振り返りながら内省を促し適応行動を「作戦会議」する	感情ではなく認知に訴える。非常時のコーピングについて作戦会議する
5. 周囲が巻き込まれずコントロールされないためのコツ	傾聴も重要だが, 傾聴しすぎると取り込まれる, 自律の手助けが中心	児童生徒の顔色をつかがう振りも利用しながら, 複数の教員でみていく	自己の行動が他者を傷つける自覚がない。セラピストが SV を受けるのが良い。
6. 期待や価値観を押し付けることをやめる	児童生徒が期待に応えないといけなないと思込みすぎないよう声かける	大前提として確保されている	セラピーに来てほしいという期待は持ち, 継続的来談に向けて作戦会議する
7. 目的や枠組み, 支える側の限界も明確にする	教員によって支援が変わるのは良くないため, 一貫性を重視する	かえて児童生徒が安心するため, 支援の限界, 生活ルールなどを定める	セラピーの枠と限界について合意を取り付ける

●教師の支援力およびバーンアウトと関連する要因の探索(量的調査)

では, 上記のような支援力はどのような要因によって支えられているかを探索するため量的調査を行った。200 名を対象に, 支援力の指標として学級経営(地域の学校を対象とするため教育臨床的指標ではなく, 学級経営を指標とした)を用いた。共変量としては, 個人レベル変数としてインクルーシブ教育コンピテンシーおよび特別支援教育コンピテンシーを用いた。学校レベルの変数として, 学校のインクルーシブ教育推進行動, 学校の特別支援教育推進行動および学校風土を測定した。200 票の回答のうち, 学級に気になる子どもがいると回答した 73 票を対象に多次元尺度構成法を用いて変数間の関連を探索した(図 1)。集計の結果, 学級経営の状態は, 個人レベル変数のインクルーシブ教育コンピテンシーと正の関連を示し, 学校レベル変数の特別支援教育推進と正の関連を示すことが分かった。このことから, 教師個人の能力としてはインクルーシブ教育に適応したスキルや態度を学習すること, 学校レベルではインクルーシブを越えて, 特別支援教育の研修や体制整備・充実が有効であることが示唆された。

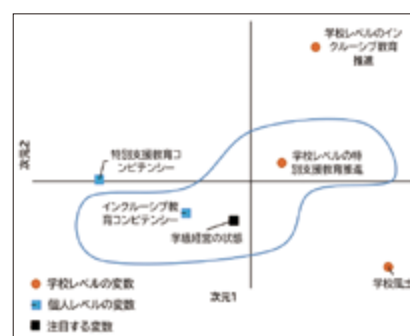


図1 変数間の関連(多次元尺度構成法)

インパクト(波及効果)●

- ・境界性人格障害の障害特性について, 異職種の理解と支援の方式を知ることで, 理解の広がりや支援アプローチの相対化・新たなアプローチの開発への契機となった。
- ・他方, 異職種連携の困難も見えてきた。子どもたちと接する頻度, 背景にある理論, 教育目標が異なることで, 連携には一定の困難が生じうることもみえてきた。互いの支援アプローチの効果を相互に高め合える状況を実現するためにも, 理論面での相互理解, 実務上の連携体制整備が重要であると考えられる。

地域や博物館の教育資源を活用した 教育活動

徳島県立博物館

25

理科教育コース 寺島 幸生

徳島県立博物館 丸山 直生

研究事業の概要

博物館や地域が有する自然・文化・歴史等に関する知見と、本学の教育および教員養成の強みを生かして、鳴門・徳島地域の自然・文化・歴史等に関する調査・研究を行った。得られた情報や資料を基に、地域について総合的に探究するための教材を開発し、それを用いた教育活動を実践した。また、得られた研究成果については、教員養成に係る教育活動に活用した。

具体的な取り組み

- ・県内外の博物館や動植物園, 市民活動等を視察し, 本研究の遂行に必要な情報を収集した。
- ・本学周辺, 鳴門・徳島地域の動植物や環境等を調査し, 標本・模型や資料等を作製した。
- ・作製した標本・模型や資料等を教材化し, それらを活用した教育活動を学内外で実践した。
- ・得られた研究成果を本学の授業や卒業研究など教員養成に係る各種教育活動に活用した。

アウトプット (研究対象に提供されたサービスなど)

主に理科の教員免許や学芸員資格の取得を目指す本学学生に対して, 以下のような学修機会や教材等を提供した(図1・2・3)。

- ・地域での探究活動に必要な基本的知識や技能について学ぶ実習
- ・地域の自然・文化・歴史等について調査するフィールドワーク
- ・地域調査で得られた標本や資料等を活用したワークショップ

アウトカム (短期的成果)

- ・本学周辺や鳴門・徳島地域の自然・文化・歴史等に関する具体的知見
- ・学習者における探究のための知識や技能の習得
- ・地域の自然・文化・歴史等について総合的に学ぶための学習教材や学習プログラムの開発
- ・学習者における地域に対する理解や愛着の深まり

インパクト（波及効果）

- ・地域密着型の調査・研究における博物館と大学の共同研究体制の強化
- ・本学および博物館がそれぞれ所有する教育資源や人脈の共有と有効活用
- ・本学周辺，鳴門・徳島地域の新たな学術的価値の創出
- ・地域の自然・文化・歴史等を教育活動に積極的に活用できる教員の養成や，地域に貢献する人材の育成



図1 博物館職員による理科教員志望学生を対象とした生物試料を用いたワークショップ



図2 博物館職員による学芸員資格取得希望学生を対象とした教材作製のワークショップ



図3 ワークショップで用いたセミの抜け殻を用いた学習教材

SDGs達成に向けた意識・行動変容を 推進する大学×NPO連携の教育活動

NPO 法人徳島サステナブル社会推進センター（エコみらいとくしま）

26

理科教育コース 寺島 幸生

NPO 法人徳島サステナブル社会推進センター（エコみらいとくしま） 布川 洋之

NPO 法人徳島サステナブル社会推進センター（エコみらいとくしま） 田村 真弓

徳島県生活環境部サステナブル社会推進課（エコみらいとくしま） 川原 也歩

研究事業の概要

SDGsの2030年達成に向けて、個人の意識・行動変容が課題となっている。本学とNPOが連携・協働して、SDGs（特に環境、エネルギー、教育関連分野の各目標）達成に向けた個々人の意識・行動変容を促す各種教材を開発し、それらを活用した教育活動を地域や大学において実践した。実践的研究によって得られた成果については、関連する学会、地域の普及・啓発イベント、誌面等で発信し社会に還元した。

具体的な取り組み

- ・ 関連行事や施設の視察、フィールド現地調査および文献・資料収集
- ・ SDGs（特に環境、エネルギー、教育関連分野の各目標）に関する各種教材開発
- ・ 開発教材を活用した本学学生、地域の児童生徒および一般向けの教育活動の実践
- ・ 学会や関連行事、誌面等における研究・実践成果の発表や普及・啓発活動

アウトプット（研究対象に提供されたサービスなど）

本学学生および連携機関のイベント参加者に対して、以下に関して体験的に学ぶワークショップを提供した。

- ・ 再生可能エネルギー（特に太陽熱）を有効利用するための科学技術（図1）
- ・ 身近な動植物や地域の自然環境の現状（特に鳴門に生息するコウノトリの生態）とそれらの保全に向けた取組（図2）
- ・ 世界の気候変動、エネルギー、廃棄物の諸問題とSDGs達成の重要性

アウトカム（短期的成果）

- ・ 本学およびNPOがそれぞれ所有する教育資源や人脈の共有と有効活用
- ・ 再生可能エネルギーを利用する光熱器具の開発・利用・普及
- ・ 地域の環境問題とその保全活動に対する学習者の認知度や理解度の向上

- ・SDGs 達成に向けた学習者個人の意識・行動の具体的な変容

インパクト（波及効果）

- ・連携機関との継続的な共同研究体制の構築・強化
- ・個人・家庭・地域における再生可能エネルギーの利用促進
- ・SDGs 達成に向けた個々人の意識・行動変容の拡大
- ・科学・教育・社会変革を促す市民参加型の調査・研究の推進・発展



図1 太陽熱利用に関するワークショップ（エコみらいとくしまにて）



図2 コウノトリの生態や保護活動に関するワークショップ（鳴門教育大学にて）

2026年3月 発行

令和7年度 **学校支援事例報告集**

編集・発行 / 鳴門教育大学学術情報推進課

〒772-8502

徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地